

宮崎市文化財調査報告書 第124集

きた じゅう  
北中遺跡 V

平成26年度国宝重要文化財等保存整備費補助金対象事業発掘調査報告書



2019

宮崎市教育委員会



宮崎市文化財調査報告書 第124集

きた じゅう  
北中遺跡 V

平成26年度国宝重要文化財等保存整備費補助金対象事業発掘調査報告書

2019

宮崎市教育委員会





北中遺跡（5次調査）空中写真（真上から）



北中遺跡（5次調査）空中写真（真上から）



北中遺跡（5次調査）空中写真（真上から）



竪穴建物 1 焼土集中部分写真①



竪穴建物 1 焼土集中部分写真②



## 序

宮崎市は、太陽と緑あふれる宮崎県の県都として、日々発展を続けています。市内では様々な開発事業が行われていますが、地中には遺跡（埋蔵文化財）と呼ばれる、過去の人たちが生活した痕跡が埋蔵されている場所があります。工事により消失を余儀なくされた埋蔵文化財については、文化財保護法に則り、事前に教育委員会による発掘調査を実施し、調査成果を後世へと伝えています。

今回発掘調査を行った北中遺跡は吉村町にあります。共同住宅の建築に伴い発掘調査が行われ、古墳時代の鉄製品の製造に係る建物が発見されました。また、その後に掘られた溝の痕跡も確認されました。これらの遺構や素焼きの出土遺物は、この地に生活した人々の素朴な生活ぶりが窺えます。現代に生きる私たちは、こうした成果を未来へと残してゆかねばなりません。

発掘調査は、冬に実施されました。調査中は、古墳時代もそうだったように寒波や強風に苛まれましたが、調査を終え、こうして報告書の刊行に至ることができたのも、調査にご理解いただいた地権者をはじめ周辺住民の方々のご理解や、発掘作業に従事された作業員の方々のご協力によるものです。末尾ではございますが、この場を借りまして、心よりお礼申し上げます。

平成 31 年 3 月

宮崎市教育委員会

教育長 西田 幸一郎

# 例 言

1. 本書は、平成26年に現地における発掘調査を実施した、国宝重要文化財等保存整備補助金対象事業（宮崎市市内遺跡）に伴う、北中遺跡第5次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本発掘調査は、民間事業者から依頼を受け、宮崎市教育委員会文化財課が実施した。

3. 発掘調査、整理作業は以下の手続きを経て実施した。

平成26年度(発掘調査)

進達文書 平成26年12月10日(宮教文767号1)  
伝達文書 平成27年12月15日(0850-7-288)  
発掘調査 平成26年1月28日～平成26年3月25日  
着手報告 平成26年1月28日(宮教文第808号2)  
発見通知 平成26年3月30日(宮教文第808号5)  
完了報告 平成26年3月30日(宮教文第808号4)  
保管証 平成27年4月14日(宮教文第40号)

平成28年度(整理作業)

整理作業 平成28年5月18日～平成29年2月28日

4. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 宮崎市教育委員会 文化財課

平成26年度(発掘調査)

文化財課	課長	日高 貞幸
整理総括	埋蔵文化財係長	島田 正浩
調整担当	主査	鳥枝 誠
庶務担当	主任主事	谷口 広清
調査担当	主査	金丸 武司
	嘱託	大嶋 昭海

平成28年度(整理作業)

文化財課	課長	羽木本光男
整理総括	副主幹兼埋蔵文化財係長	井田 篤
調整担当	副主幹兼埋蔵文化財係長	井田 篤
庶務担当	主任主事	武富 知子
整理担当	主査	金丸 武司
	嘱託	小野 貞子

5. 現地における測量は、トータルステーションを用いて行い、個別の遺構実測図は1/20、1/10で作成した。また、個別の写真撮影については6×7判モノクロ・リバーサルフィルムと35mmモノクロ・リバーサルフィルムを併用した。
6. 現地における遺構実測は金丸、大嶋が行った。
7. 遺構の写真撮影は金丸と大嶋が行った。また、空中写真撮影、及び写真の合成は、(有)スカイサーベイ九州に委託した。なお、出土遺物の写真撮影は金丸が行った。
8. 遺物の実測・トレースは、金丸の指導の下、小野及び室内整理作業員が行った。
9. 本書で使用する土色の表記は『新版 標準土色帳』に依拠した。
10. 本書で使用する北は真北である。
11. 出土遺物及び掲載図面及び写真、記録等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。
12. 本書の執筆・編集は金丸が行った。

# 目次

## 本文目次

第 I 章 遺跡周辺の環境・・・・・・・・・・ 1	第 2 節 基本土層・・・・・・・・・・ 4
第 1 節 地理的環境・・・・・・・・・・ 1	第 3 節 竪穴建物・・・・・・・・・・ 6
第 2 節 歴史的環境・・・・・・・・・・ 1	第 4 節 掘立柱建物・・・・・・・・・・ 15
第 II 章 調査に至る経緯と経過・・・・・・・・ 3	第 5 節 ピット群・・・・・・・・・・ 15
第 1 節 調査に至る経緯・・・・・・・・ 3	第 6 節 溝状遺構・・・・・・・・・・ 15
第 2 節 調査の経過・・・・・・・・・・ 3	第 7 節 上層及び攪乱層出土遺物・・ 17
第 III 章 調査の成果・・・・・・・・・・ 4	第 IV 章 まとめ・・・・・・・・・・ 19
第 1 節 調査成果の概要・・・・・・・・ 4	

## 挿図目次

第 1 図 周辺の遺跡・・・・・・・・・・ 2	第 10 図 竪穴建物 2 実測図・・・・・・・・ 12
第 2 図 北中遺跡の範囲と調査区の位置・ 3	第 11 図 竪穴建物 2 土器埋設炉実測図・・ 12
第 3 図 遺構分布図・・・・・・・・・・ 4	第 12 図 竪穴建物 2 内土坑と出土遺物・・ 13
第 4 図 竪穴建物 1 実測図・・・・・・・・ 5	第 13 図 竪穴建物 2 内出土遺物・・・・・・・・ 13
第 5 図 竪穴建物 1 柱穴土層断面図・・ 6	第 14 図 掘立柱建物 1・・・・・・・・・・ 14
第 6 図 竪穴建物 1 焼土集中部分と出土遺物・ 7	第 15 図 ピット群分布図・・・・・・・・・・ 15
第 7 図 竪穴建物 1 住居内土坑と出土遺物・ 8	第 16 図 溝状遺構 2 と出土遺物・・・・・・・・ 16
第 8 図 竪穴建物 1 出土遺物(1)・・・・ 10	第 17 図 上層及び攪乱層出土遺物・・・・ 17
第 9 図 竪穴建物 1 出土遺物(2)・・・・ 11	

## 表図版

第 1 表 北中遺跡出土土器観察表(1)・・ 18	第 3 表 北中遺跡出土土製品観察表・・ 19
第 2 表 北中遺跡出土土器観察表(2)・・ 19	第 4 表 北中遺跡出土石器観察表・・ 19

## 写真図版

図版 1 北中遺跡空中写真(1)	図版 8 竪穴建物 1 内出土遺物写真・・ 26
図版 2 北中遺跡空中写真(2)	図版 9 竪穴建物 1 内出土遺物、竪穴建物 2・・ 27
図版 3 北中遺跡空中写真(3)	図版 10 竪穴建物 2 遺物出土状況・・ 28
図版 4 竪穴建物 1 調査時写真・・・・・・・・ 22	図版 11 竪穴建物 2 内出土遺物写真・・ 29
図版 5 竪穴建物 1 及び屋内焼土・・・・・・・・ 23	図版 12 竪穴建物 2 内出土遺物、及びピット群・ 30
図版 6 竪穴建物 1 屋内土坑・・・・・・・・ 24	図版 13 溝状遺構 1 完掘状況・・・・・・・・ 31
図版 7 竪穴建物 1 遺物出土状況・・・・・・・・ 25	図版 14 溝状遺構 2 完掘・断面・・・・・・・・ 32

# 第 I 章 遺跡周辺の環境

## 第 1 節 地理的環境

宮崎平野は、宮崎県中部東部の日向灘沿岸に位置する。海岸線の後退と共に砂丘（浜堤）を形成した海岸平野の典型とされ、平野の東部には、海岸線の後退によって形成された 4 列にわたる浜堤（砂丘）を見ることができる。加えて平野の中央を流れる大淀川は、これまで何度も流路を変えており、平野内にはその痕跡も残されている。

北中遺跡は、宮崎平野東部、大淀川左岸の河口付近に点在する小規模な砂丘上に立地する。現況の標高は約 5m である。

## 第 2 節 歴史的環境

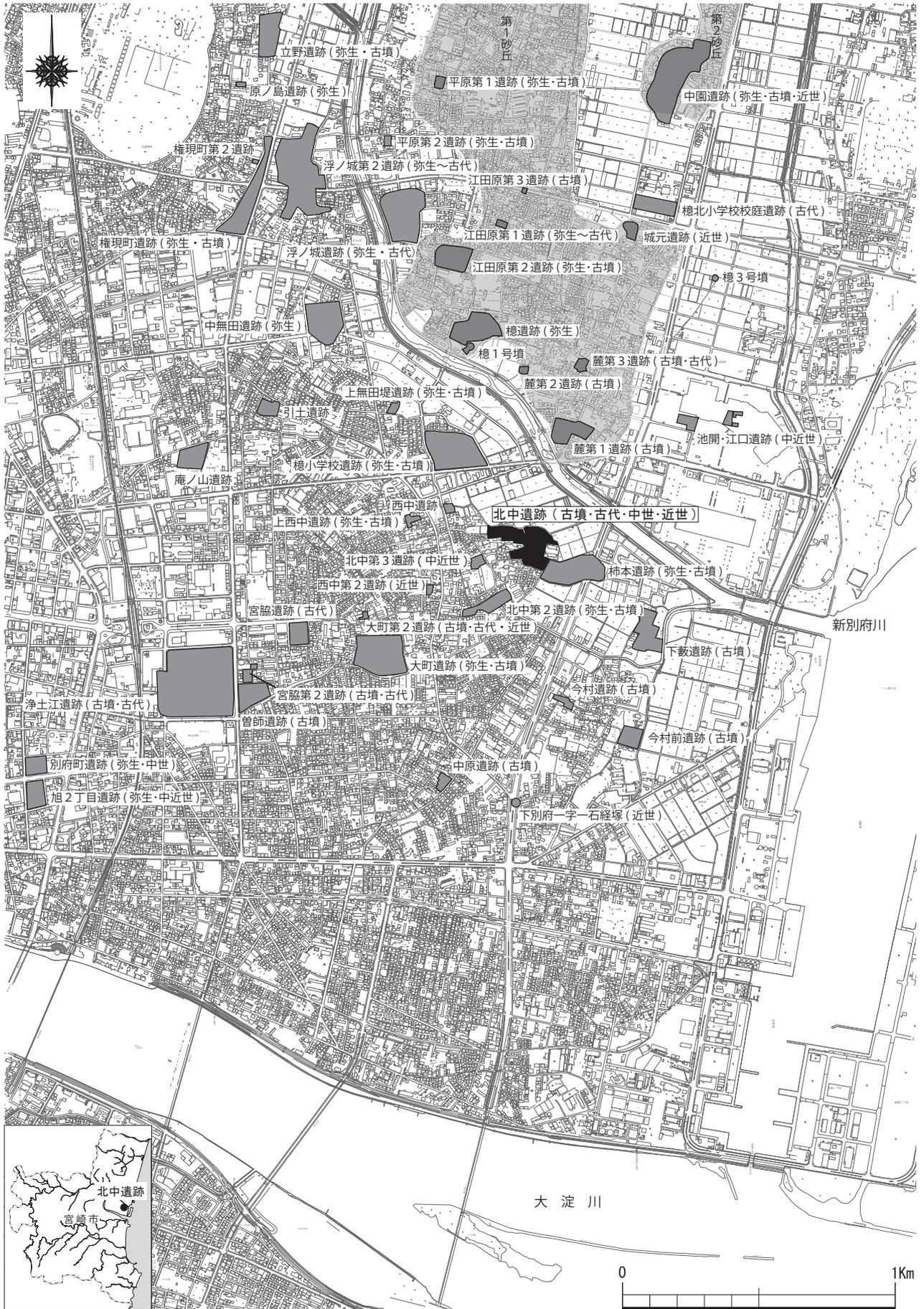
北中遺跡は、宅地造成や宗教施設建設に伴い、平成 9 年、13 年、14 年、26 年の 4 度にわたり発掘調査が実施されている。その結果、古墳時代に当たる竪穴建物（38 軒）、掘立柱建物（5 棟）、地下式横穴墓（10 基）が検出され、古墳時代中期後半（5c 後半）～後期（6c 代）にかけて、大規模な集落が存在したと考えられる。出土遺物は、土師器、須恵器を中心として、鉄製品、滑石製白玉、有効円盤、土玉のほか、金属製の付着した土師器やフイゴ羽口など、鍛冶に関連した遺物も確認されている。遺構としては、古代から近世に構築・埋没した溝状遺構や掘立柱建物が確認されている。

北中遺跡の西側、低地を挟んだ対岸の段丘上には大町遺跡が立地する。平成 8 年、宅地造成に伴う発掘調査により、弥生時代は竪穴建物 2 軒、掘立柱建物 3 棟、周溝状遺構 3 基検出されたほか、古墳時代は後期（6c 後半～7c 前半）を主体として竪穴建物 61 軒、竪穴建物の壁面を利用した地下式横穴墓 3 基、竪穴状遺構 6 基が検出された。竪穴建物の埋土から出土した土師器は多量かつバラエティーに富むことから、今日宮崎県中部における土師器編年の基礎資料に位置づけられている。なお、大町遺跡の北側には大町第 2 遺跡が立地しており、平成 27 年、宮崎駅東通線建設に伴う発掘調査が行われ、大町遺跡と同時期にあたる古墳時代後期の竪穴建物が 5 軒検出された。北中遺跡における古墳時代集落の最盛期とほぼ同時期に、大町遺跡でも集落が最盛期を迎えていたことが判明した。

大町遺跡の東の段丘面には宮脇第 2 遺跡が立地する。平成 14 年、施設改築に伴う発掘調査の結果、古墳後期（6c 後半）～平安時代（9c 初頭）の竪穴建物が多数確認された。竪穴建物からはカマドで祭祀を行った痕跡が検出されたほか、「大」の字が刻まれた刻書土器（8c 末～9c 初）が出土した。

宮崎駅東方の西端部、現在宮崎市中央公園は浄土江遺跡が立地する。昭和 52 年、53 年、54 年、平成 3 年に実施した発掘調査の結果、古墳中期（5c 代）～奈良時代の竪穴住居 33 軒ほか、溝状遺構が多数検出された。集落の中心は古墳後期（6c 代）～奈良時代（8c 代）であり、宮脇第 2 遺跡も含め、一連の集落が展開していたと考えられる。

以上のとおり、北中遺跡周辺は古墳時代後期を頂点として、弥生時代から古代の集落が数多く分布する地域である。



第1図 周辺の遺跡 (S=1:20000)

## 第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成26年10月、共同住宅建築にあたり、土地所有者より埋蔵文化財の有無照会があった。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「北中遺跡」の域内に当たることから、平成26年10月17日に確認調査を実施。その結果、竪穴建物をはじめ多くの遺構が確認されたことから、開発予定区域の地下30cm以内は全面に文化財が埋蔵されていると判断した。

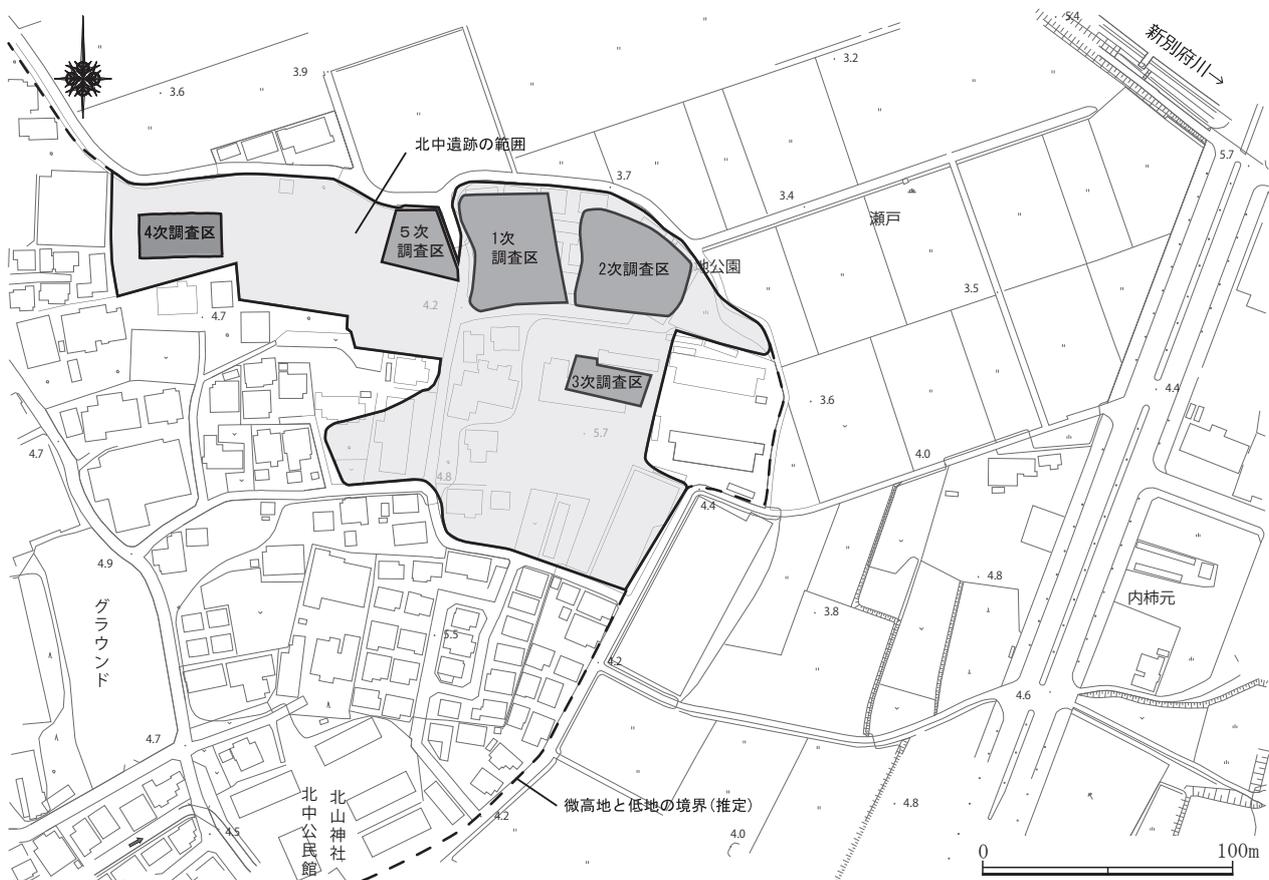
調査結果を受け、土地所有者との間で埋蔵文化財の保存について協議を実施したが、共同住宅の基礎が埋蔵文化財に及ぼす影響は免れないことから、発掘調査を実施することとなった。また、個人を事業主とする共同住宅建築であるため、国庫補助事業による発掘調査となった。

発掘調査は平成27年1月28日から3月25日にかけて実施した。

### 第2節 調査の経過

調査区の中で廃土置き場を設置したため、北側と南側に分けて調査を実施した。

北側の発掘調査は、平成27年1月28日から1月30日にかけて表土剥ぎを行い、2月2日から2月23日まで、人力による掘削作業及び記録作業を実施した。廃土の移動、及び南側の表土剥ぎ終了後、2月26日から人力の掘削・記録作業を再開した。記録作業にあたっては、調査員による手測りによる図化やトータルステーションを用いた実測、フィルムカメラ、デジタルカメラによる写真撮影による記録作業を実施した。また作業に併せて、北側、南側で空中写真撮影を実施した。



第2図 北中遺跡の範囲と調査区の位置 (S=1:3000)

## 第三章 調査の成果

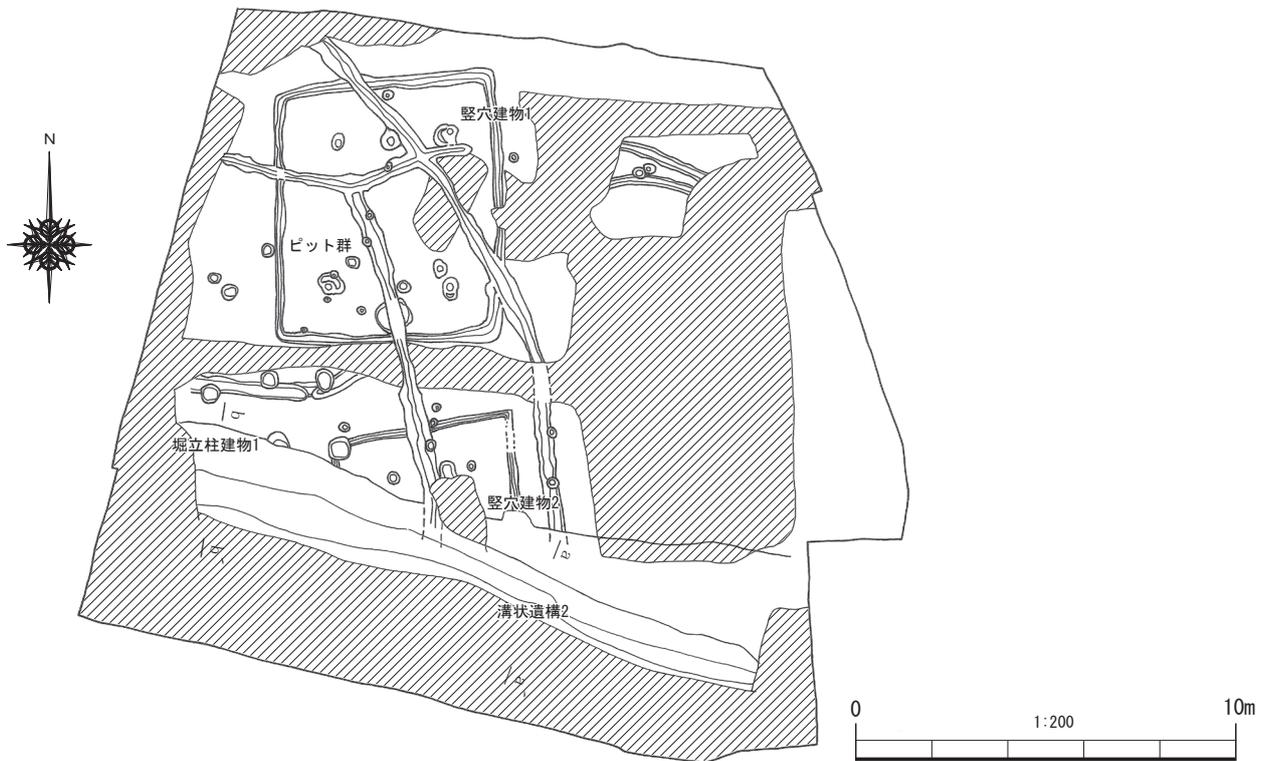
### 第1節 調査成果の概要

今回の調査で確認された遺構、遺物は古墳時代から古代及び中世・近世に相当する。遺構の内訳は竪穴建物2軒、掘立柱建物1棟、溝状遺構、ピット群である。このうち竪穴建物1は古墳時代中期に当たり、床面から焼土が検出されたほか、周辺より羽口や赤化した石が出土した。竪穴建物2もほぼ同時期であり、土器埋設炉等が検出された。他に掘立柱建物、北部から中部にかけて確認された溝状遺構も古墳時代後期から古代の所産と考えられる。なお調査区南部で検出した溝状遺構は中世から近世にかけて、掘り返されながら使用された。

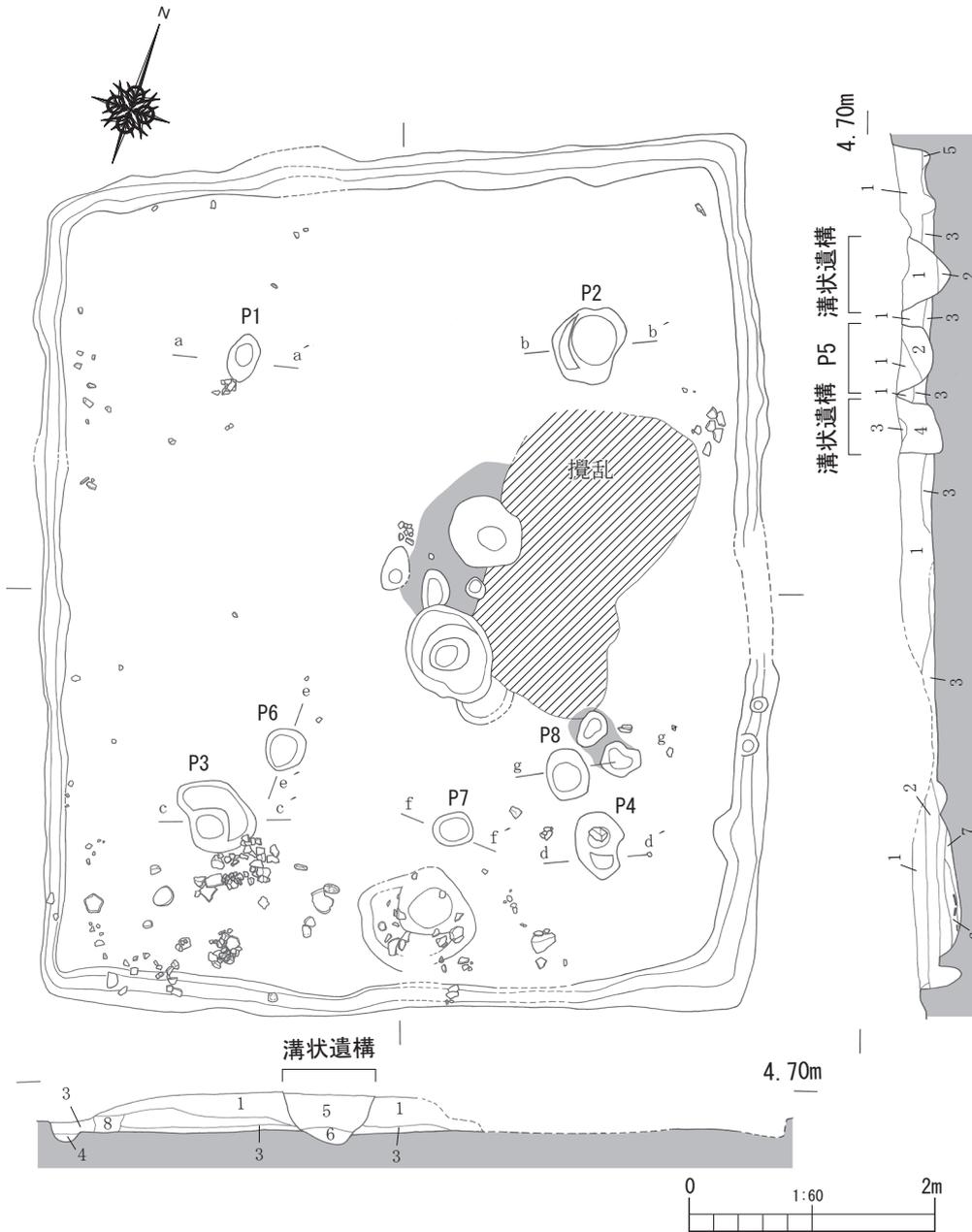
遺物は竪穴建物から古墳時代に当たる土師器、須恵器、羽口等の土製品、石器が出土したが、溝状遺構や掘立柱建物からの出土は極めて希薄であった。中世の溝状遺構からは中・近世に当たる陶磁器と共に古墳時代から中世の土師器も出土した。このほか表土からも少量ながら遺物が確認された。

### 第2節 基本土層

調査区は現地表面下に暗褐色の瓦礫を含む表土があり、その下は周辺の沖積微高地上に広く認められる黄褐色細粒砂質土である。遺構検出はこの上面で行った。ただし調査区内は、戦後に建てられた宅地により激しい削平を受けており、三分の一近くが既に破壊されていたため、残存部分を調査することとなった。黄褐色細粒砂質土の下には灰褐色の砂質土が厚く堆積し、更に下には粗粒の青灰色砂質土が堆積する。



第3図 遺構分布図 (S=1/200)



竪穴建物 1 土層注記

- 1 灰黄褐 (10YR4 / 2) シルト質。硬く締まっている。層中に2mm大の軽石片・小石を少量、焼土粒子を微量含む。
- 2 暗灰黄 (2.5Y5 / 2) 砂質。硬く締まっている。1層の2cm未満のブロックを多く含む。焼土粒子を微量含む。
- 3 黄褐 (2.5Y5 / 3) 砂質。やや軟質。黄褐色と灰褐色の粗粒砂質土の混合層。混入物なし。特に硬化は認められない。
- 4 灰黄 (2.5Y6 / 2) 砂質。軟質。軟質。黄褐色と灰褐色の粗粒砂質土の混合層。焼土粒子を少量含む。
- 5 にぶい黄褐 (10YR5 / 3) 砂質。軟質。黄褐色と灰褐色の2cm大のブロックを多量含む。色調は安定しない。
- 6 黄褐 (2.5Y5 / 3) 砂質。やや軟質。黄褐色の粗い砂に1cm大の黒色土のブロックが混入。
- 7 にぶい黄 (2.5Y6 / 3) 砂質。やや軟質。灰褐色の粗い砂質土主体。層全体は鉄分による斑紋を形成。
- 8 にぶい黄褐 (10YR5 / 3) 砂質。層中に1層の粒子が多く混入。1cm大の軽石片を少量含む。層は斑紋を形成する。

P5 土層注記

- 1 暗褐 (10YR3 / 3) シルト質。硬く締まっている。層は1層に似る。層中に黄褐色砂質土、焼土粒子、軽石片を微量含む。
- 2 にぶい黄 (2.5Y6 / 3) 砂質。軟質。11層と黄褐色砂質土の混合層。他に灰褐色砂質土を少量、焼土粒子を微量含む。

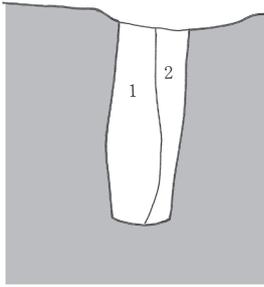
溝状遺構 土層注記

- 1 にぶい黄褐 (10YR5 / 3) シルト質。硬く締まっている。層は1層に似る。2mm大の小石を微量、軽石片を少量、焼土粒子を微量含む。
- 2 暗灰黄 (2.5Y5 / 2) 砂質土で軟質。砂層中に黒色土が少量混入。2mm大の小石を少量含む。斑紋を形成し色調は安定しない。
- 3 暗褐 (10YR3 / 3) シルト質。層中に高原スコリアを少量含む。
- 4 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) シルト質。硬く締まっている。指先大の軽石を少量含む。
- 5 灰黄褐 (10YR4 / 2) シルト質。硬く締まっている。層中に焼土粒子を少量、2mm大の軽石と小石をそれぞれ微量含む。
- 6 黄褐 (2.5Y5 / 3) シルト質。非常に軟質。黄褐色砂質土を多量に含み、斑紋を形成する。層中に焼土粒子を少量、2mm大の軽石を微量含む。

第4図 竪穴建物1実測図 (S=1/60)

P1

a 4.50m

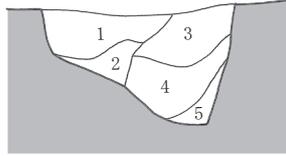


## P1 土層注記

- 1 灰黄褐 (10YR4 / 2) シルト質で著しく軟質。黒色土主体。層中に黄褐色砂質土を少量含む。
- 2 灰黄褐 (10YR5 / 2) 砂質。軟質。黄砂が1cm大のブロックで多く混入。

P2

b 4.50m

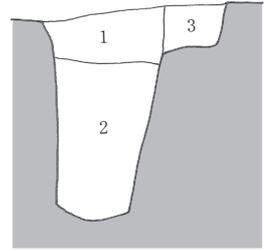


## P2 土層注記

- 1 灰黄褐 (10YR4 / 2) シルト質。灰褐色砂質土の2cm大のブロックを少量、層中にパミスを少量、小石を微量含む。
- 2 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) 砂質。灰褐色の粗い砂質土を多量、パミスを少量含む。
- 3 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) 砂質。黒色土、黄褐色砂質土、パミスを夫々少量含む。
- 4 褐灰 (10YR4 / 3) シルト質。層中に5mm大の黄褐色砂質土のブロックを少量、小石を少量含む。
- 5 暗灰黄 (2.5Y5 / 2) 砂質。黄褐色砂質土、灰褐色の粗い砂質土により構成。小石を少量含む。

P3

c 4.50m

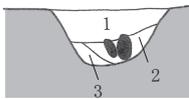


## P3 土層注記

- 1 にぶい黄 (2.5Y6 / 4) 砂質。軟質。黒色土を多量、パミスを少量含む。
- 2 にぶい黄 (2.5Y6 / 3) 砂質。軟質。黄褐色砂質土と灰褐色の粗い砂質土により構成、小石を少量含む。
- 3 にぶい黄 (2.5Y6 / 4) 砂質。軟質。黄褐色砂質土主体。パミスを多く含む。

P4

d 4.50m

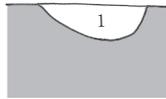


## P4 土層注記

- 1 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) シルト質。硬く締まっている。層中に2mm大の黄褐色砂質土のブロックを多量含む。
- 2 にぶい黄褐 (10YR5 / 3) 砂質。軟質。灰褐色の粗い砂質土と黒色土の混合層。
- 3 黄褐 (2.5Y5 / 3) 砂質。軟質。黄褐色砂質土と灰褐色の粗い砂質土主体。黒色土を少量混入。

P6

e 4.50m

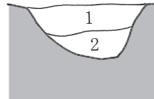


## P6 土層注記

- 1 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) シルト質。黒色土に黄褐色砂質土が粒子状に少量混じり斑紋を形成する。

P7

f 4.50m

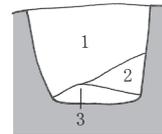


## P7 土層注記

- 1 にぶい黄 (2.5Y6 / 3) 砂質。軟質。砂質土主体で黒色土が少量混じる。層中に炭の小片を微量、パミスを少量含む。
- 2 黄褐 (2.5Y5 / 3) 砂質。軟質。砂質土主体で黒色土が少量混じる。斑紋を形成。

P8

g 4.50m



## P8 土層注記

- 1 黒褐 (10YR3 / 2) 砂質。軟質。層中に小石を多量、炭の小片を少量、焼土粒子を少量含む。
- 2 灰黄褐 (10YR4 / 2) 砂質。軟質。層中に灰褐色の粗い砂質土を主体。小石を多量に含む。



第5図 竪穴建物1柱穴土層断面図 (S=1/40)

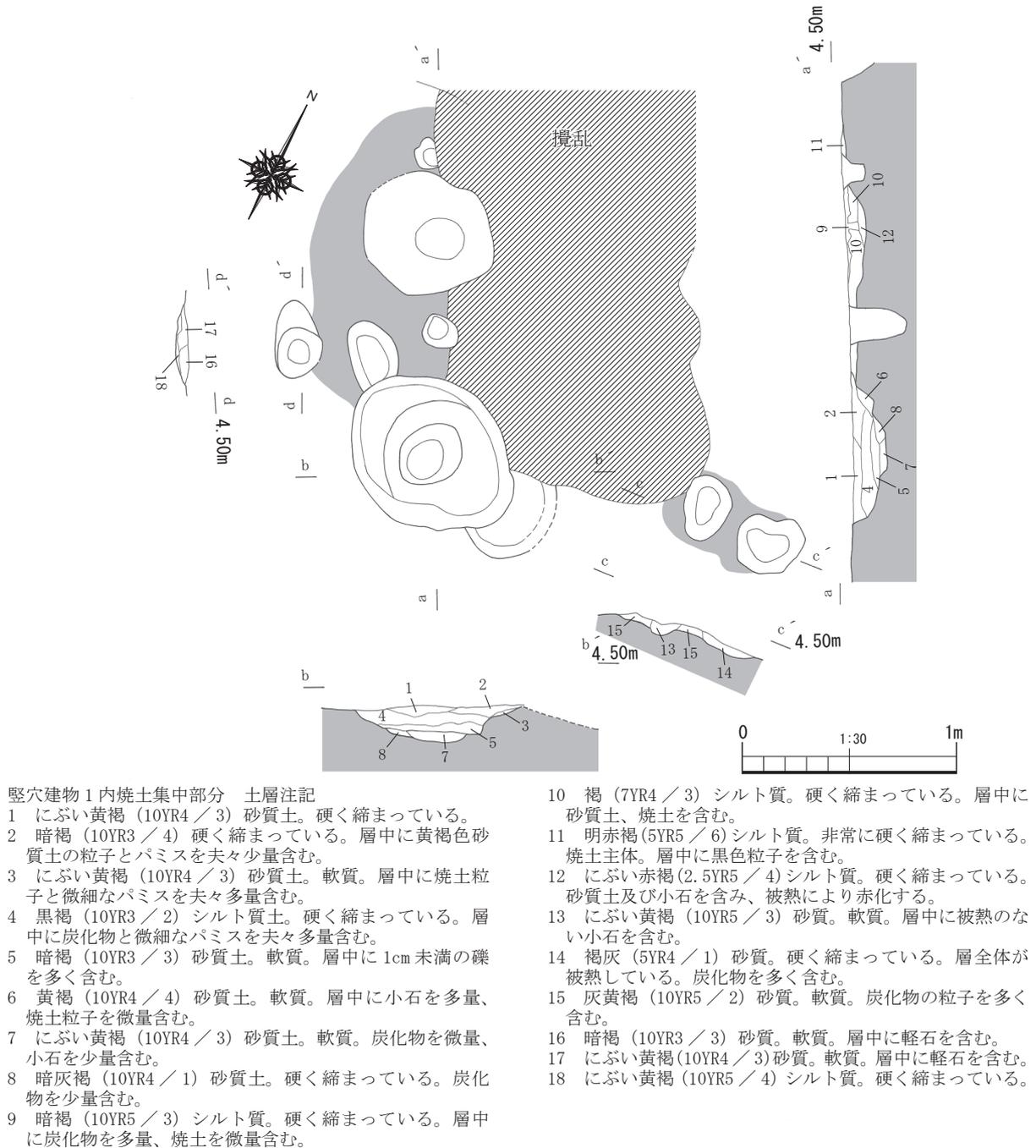
調査区内で構築された遺構のうち、竪穴建物は黄褐色細粒砂質土を床面とするが、掘立柱建物や溝状遺構1は灰褐色砂質土まで掘り込まれていた。なお中世の溝状遺構による掘削は青灰色砂質土層まで達している。

## 第3節 竪穴建物

2軒検出した。どちらも平面形は隅丸方形を呈する。

竪穴建物1 (第4図)

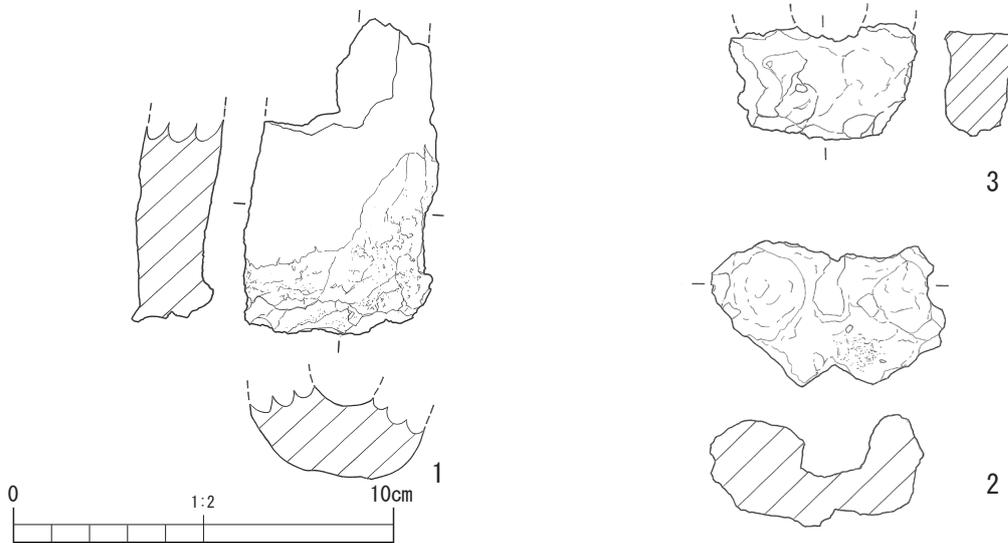
調査区北西部より、溝状遺構に切られた状態で検出した。竪穴建物の形状は、南北7.1m×



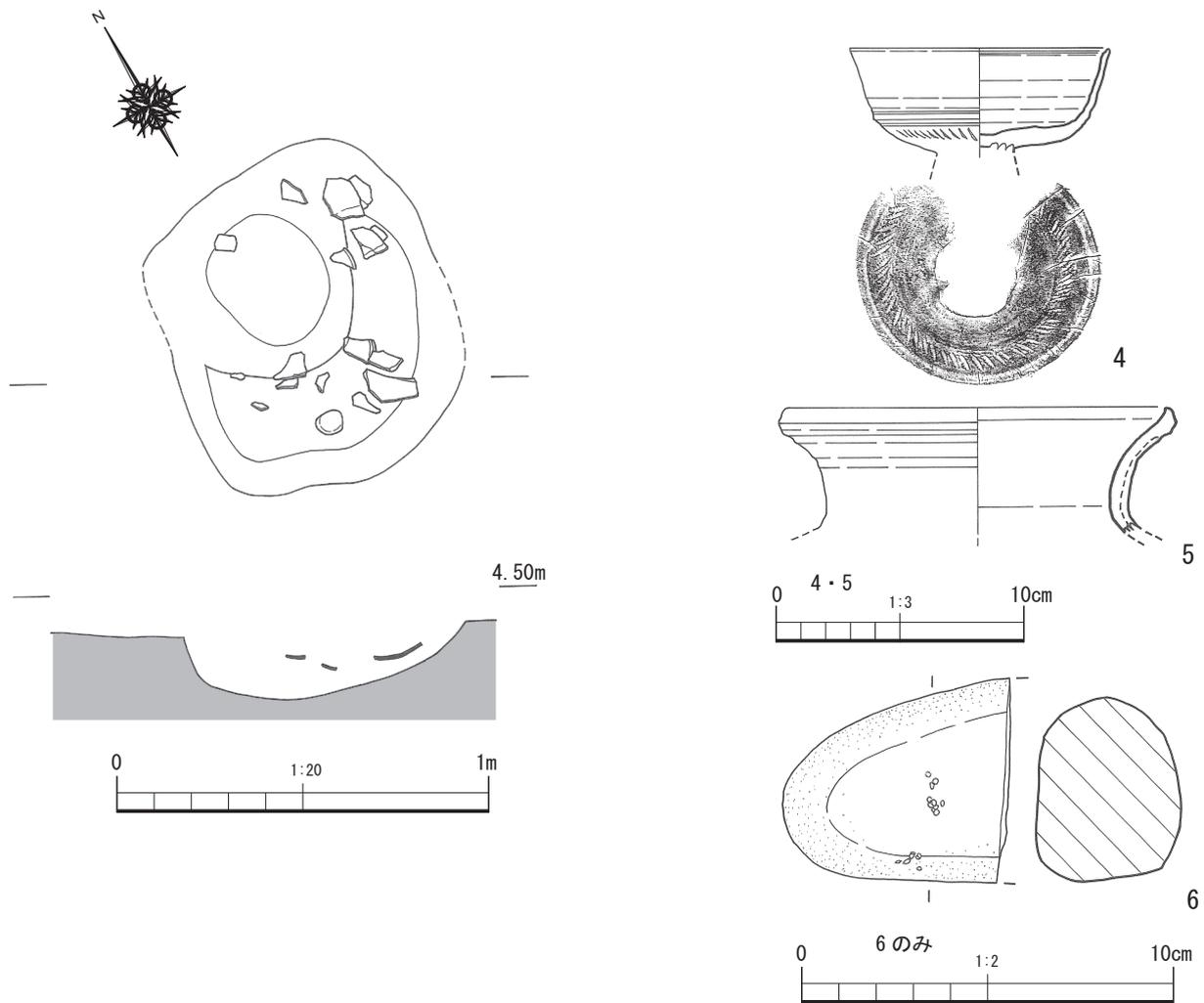
竪穴建物1内焼土集中部分 土層注記

- 1 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) 砂質土。硬く締まっている。
- 2 暗褐 (10YR3 / 4) 硬く締まっている。層中に黄褐色砂質土の粒子とパミスを夫々少量含む。
- 3 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) 砂質土。軟質。層中に焼土粒子と微細なパミスを夫々多量含む。
- 4 黒褐 (10YR3 / 2) シルト質土。硬く締まっている。層中に炭化物和微細なパミスを夫々多量含む。
- 5 暗褐 (10YR3 / 3) 砂質土。軟質。層中に1cm未満の礫を多く含む。
- 6 黄褐 (10YR4 / 4) 砂質土。軟質。層中に小石を多量、焼土粒子を微量含む。
- 7 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) 砂質土。軟質。炭化物を微量、小石を少量含む。
- 8 暗灰褐 (10YR4 / 1) 砂質土。硬く締まっている。炭化物を少量含む。
- 9 暗褐 (10YR5 / 3) シルト質。硬く締まっている。層中に炭化物を多量、焼土を微量含む。

- 10 褐 (7YR4 / 3) シルト質。硬く締まっている。層中に砂質土、焼土を含む。
- 11 明赤褐 (5YR5 / 6) シルト質。非常に硬く締まっている。焼土主体。層中に黒色粒子を含む。
- 12 にぶい赤褐 (2.5YR5 / 4) シルト質。硬く締まっている。砂質土及び小石を含み、被熱により赤化する。
- 13 にぶい黄褐 (10YR5 / 3) 砂質。軟質。層中に被熱のない小石を含む。
- 14 褐灰 (5YR4 / 1) 砂質。硬く締まっている。層全体が被熱している。炭化物を多く含む。
- 15 灰黄褐 (10YR5 / 2) 砂質。軟質。炭化物の粒子を多く含む。
- 16 暗褐 (10YR3 / 3) 砂質。軟質。層中に軽石を含む。
- 17 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) 砂質。軟質。層中に軽石を含む。
- 18 にぶい黄褐 (10YR5 / 4) シルト質。硬く締まっている。



第6図 竪穴建物1焼土集中部分と出土遺物



第7図 竪穴建物1住居内土坑と出土遺物

東西5.5mの方形であり、磁北に対して長軸が $10^{\circ}$ 北西-南東に傾斜している。検出面から床面までの深さは約40cmであるが、東側は建物の基礎による削平が激しく、一部は $1.4\text{m} \times 1\text{m}$ にわたって遺構床面まで削り取られていた。

主柱穴は4本である(第5図)。柱穴の径は30~40cm、深さは70cm~30cmである。これ以外に、南側に比較的小規模の柱穴が3基、東西方向に並んでおり、遺構中心線に対し線対称となることから、これらの柱穴は竪穴建物1に伴うと考えられる。床面は灰褐色砂質土であり、明瞭な貼床は認められない。外縁には、幅20~30cm、深さ15~20cmの、断面U字状を呈する壁帯溝を伴う。

遺構中央よりやや東側、前述の削平部分付近からは床面付近の赤変が認められた(第6図)。これは焼土の堆積であり、その下位より円形を呈する土坑2基が検出された。焼土を埋土とする土坑のうち、最も大ぶりのP1は不明瞭ながら土坑中に段が形成され、土坑の床面も被熱により赤変していた。またP1の北にあるP2は浅い掘り込みながら、埋土は被熱した砂質土を主体としており、これも床面が被熱により赤変していた。

1~3は焼土の周囲から出土した遺物である。1は半分に破碎した羽口の下部である。下端部には溶解した鉄滓が付着しており、その周囲は熱による灰色の変色が認められる。2・3は羽口に付着し、その後剥離したとみられる鉄滓である。U字状を呈しており、特に2は一部に

羽口の痕跡が残ることから、羽口に密着した部分の鉄滓と考えられる。

遺構南辺の中央部には、90cm×80cmの、やや歪な隅丸方形を呈する土坑が認められた（第7図）。土坑は南西部に一段深い落ち込みを持つ。土坑は竪穴建物や溝と切りあっており、土層断面の観察から、土坑は竪穴建物の構築時、少なくとも壁帯溝構築前に掘られ、埋まった後に床面が形成され、竪穴建物の埋没後に溝が掘られた状況を確認した。4～6は土坑埋土中の出土遺物であり、土坑中の浅いテラス部分を中心に出土した。4は須恵器の高坏である。外面は楯描き状の工具を横位に刺突する。脚部は貼付部から剥落している。2は須恵器短頸壺の口縁部である。3は長円形を呈する平坦面を持つ砂岩製の礫である。平坦面には研磨痕が認められる。土坑中の遺物は他にもあるが、小片主体で記録可能な個体は少ない。ただ土師器主体の出土遺物の中で、本土坑の出土遺物は須恵器が主体である。

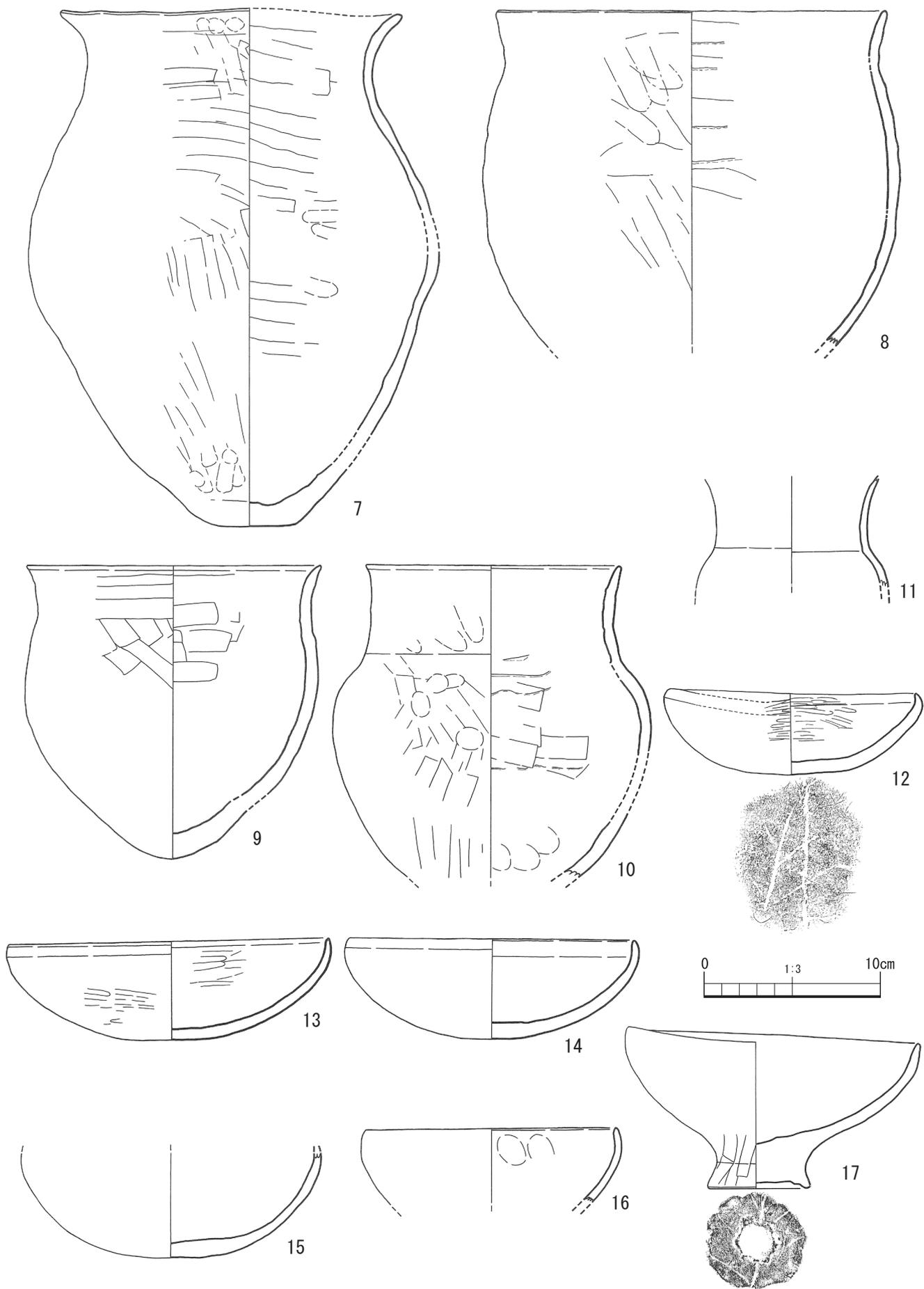
遺構南西部は遺物の集中が認められた（第8・9図）。遺物はいずれも床面付近から出土している。土師器を主体としており、他に須恵器、礫がある。7は器種は甕や模倣坏の割合が多い。出土状態は良好であり、完形に至らないが、まるで投げ捨てたように、潰れた状態で出土していた。壁帯溝の検出面より上位の出土遺物もあることから、これらの遺物は竪穴建物の廃絶後から埋没前の間に廃棄されたと考えられる。対して須恵器は同一個体の甕の小片のみであった。なお、遺物集中部分からは、粗粒の砂質土が面的に薄く広がっていた。基本土層、遺構埋土共にこのような土層は検出されないことから、遺物を廃棄する際に砂を撒いたと考えられる。

7～25は南西部の遺物集中部分の出土遺物である。7～18は土師器である。7は長胴を呈する中型の甕である。底面は僅かながら平底を呈する。8・9は球形を呈する胴部を持つ中型の甕である。9の底部には平坦面がない。10・11は頸部が長く、胴部上半を最大径とする甕である。12～15は坏である。12は底面付近に二枚の木の葉による圧痕が認められる。12・13は口縁部を中心に内外面にミガキもしくは削りによる調整痕が残される。出土した坏には窯印は認められない。16は口縁部のみであるが、形状から高坏と考えられる。17は高坏である。坏部から伸びる脚部は短く、底面の調整がみられないことから、本来の脚部が剥落したと考えられる。ただし剥落後も機能は大きく損なわれていないことから、残存部のみで使用された可能性も考えられる。19～22は須恵器、甕の胴部である。内面には同心円、外面には格子目のタタキ目が認められ、外面には自然釉が付着している。22～25は礫である。22は全面に赤化する。22～24は砂岩である。これも赤化しており、平坦面に敲打痕が残される。これらの遺物は遺構内で行われた鍛冶に関する行為の中で使用されたと考えられる。

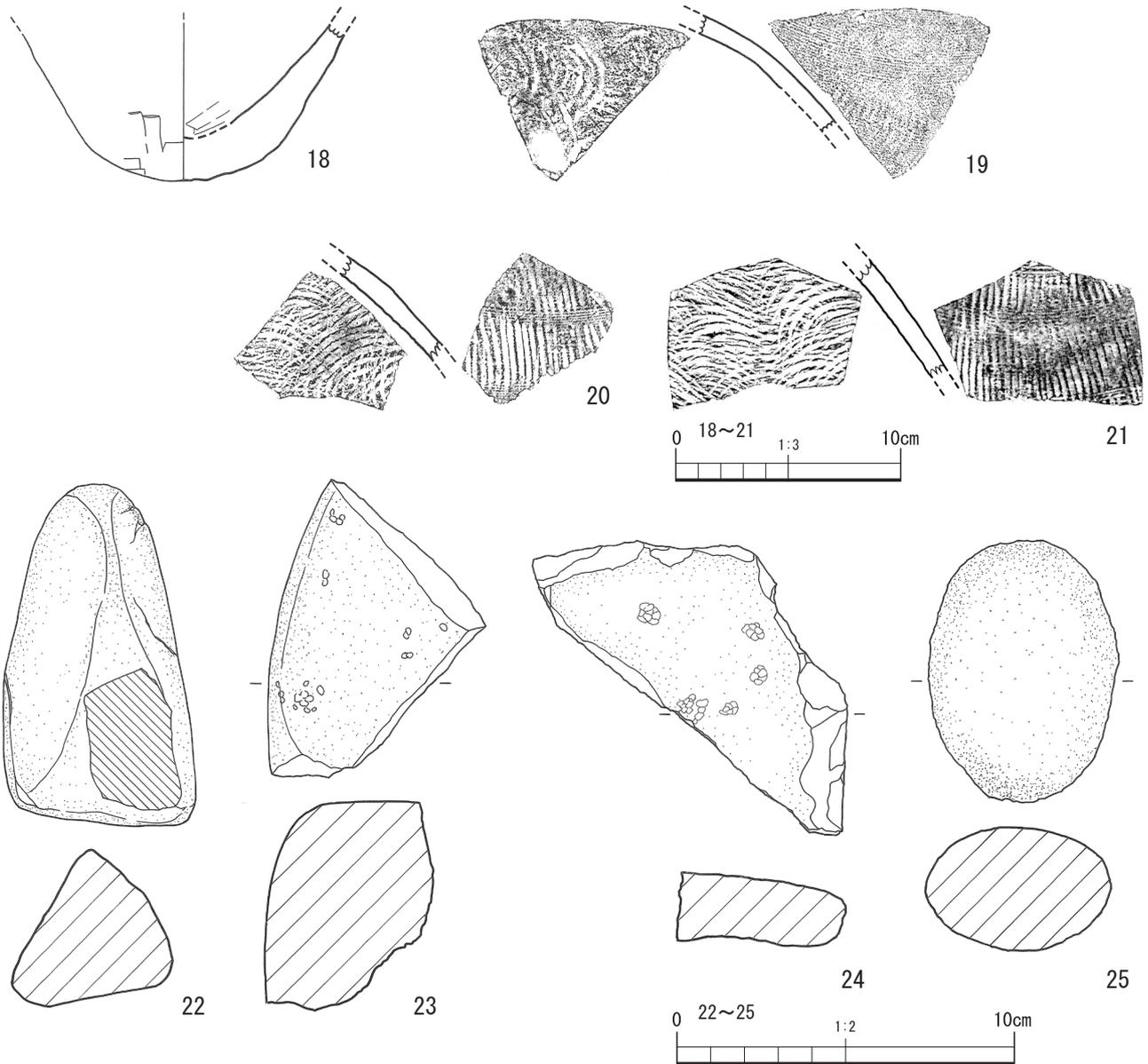
これらの遺物の出土した南西部は、壁面がオーバーハング状を呈するような掘削痕が認められた（P25写真）。軟弱な砂質土であるため、掘削は遺構廃絶から埋没までの間に行ったと考えられる。遺物の出土と併せ、壁面掘削も遺構廃絶時の儀礼的行為に伴って行われた可能性が考えられる。

#### 竪穴建物2（第10図）

調査区中央部やや南側で検出した。北辺は磁北に対し10°南西―北東に傾いている。古代の溝状遺構により遺構中央を、古代の掘立柱建物によって遺構北西隅部を、中・近世の溝状遺構によって遺構南半を、現代の攪乱により遺構東側の一部を失っており、残存状況は悪い。東西5.3mの方形を呈しており、検出面から床面までの深さは約55cmと深い。柱穴は残存部分か



第8図 竪穴建物1出土遺物(1)

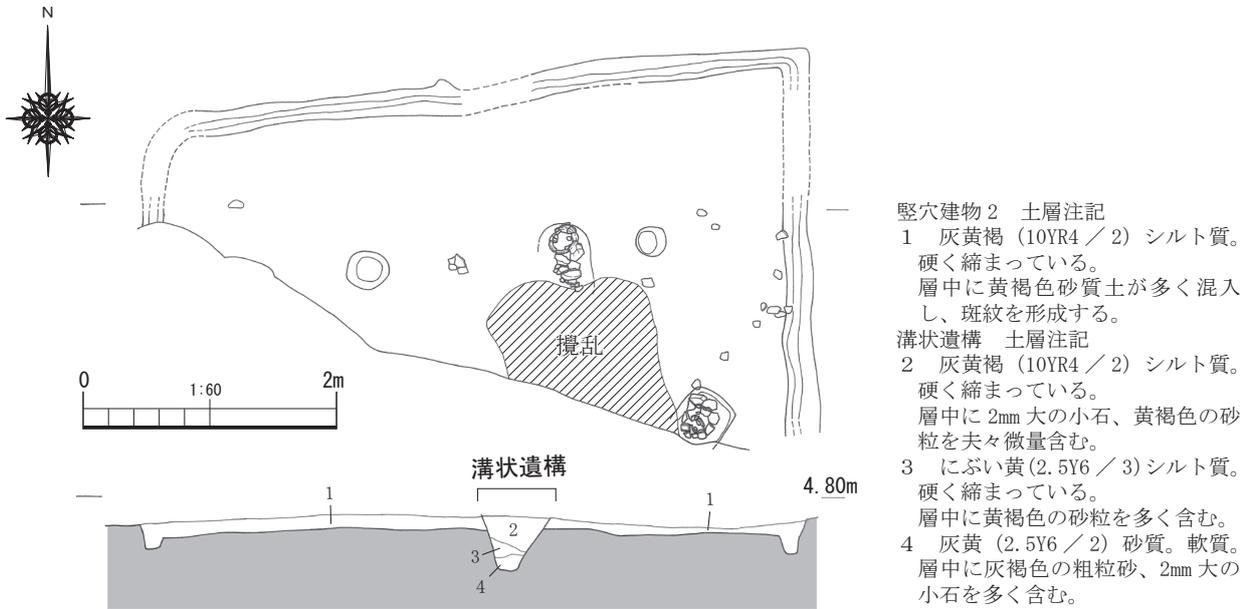


第9図 竪穴建物1出土遺物(2)

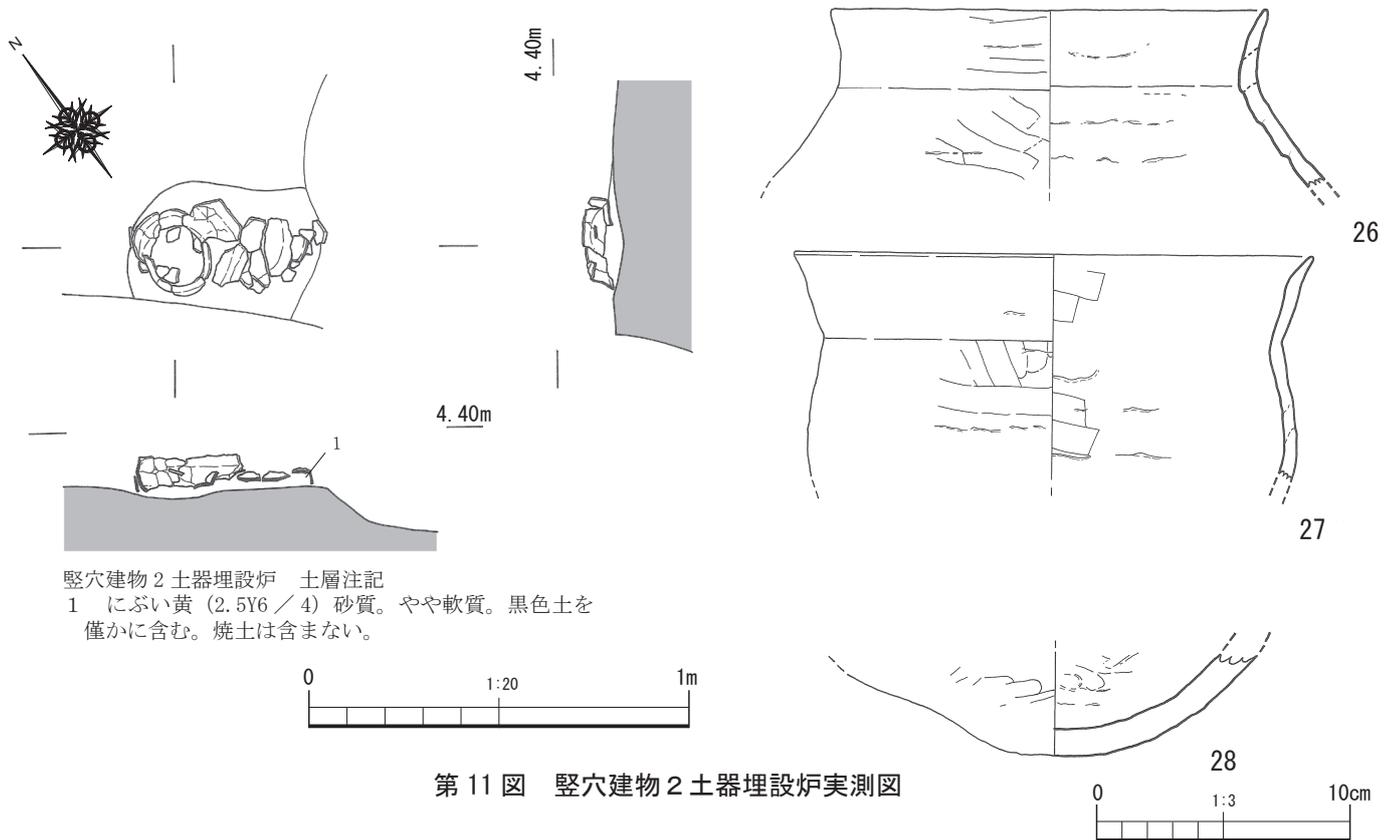
ら2基検出しており、本来は4基存在したと考えられる。遺構の周縁には幅40cm前後、深さ30cm前後の壁帯溝が確認された。床面に貼り床は認められなかった。

(第11図)は竪穴建物2残存部分の中央よりやや東にて検出した土器埋設炉である。南部を削平により失っているが、埋設炉は径約50cm深さ約10cmの浅い掘り込みに2個体の土師器を設置したと考えられる。掘り込みの埋土は焼土を含まなかった。26~28は埋設炉内の出土遺物である。26・27は、土器埋設炉を構成する甕である。26は口縁部が窄まり、胴部で大きく張り出す中型長胴甕の形状を呈する。27は口縁部でやや窄まり、胴部が球形に張ることから、中型の球形胴甕と見られる。28は丸底を呈する甕の底部である。平坦面を持たないことから、胴部は球形もしくは長胴を呈する甕と考えられる。

(第12図)は竪穴建物2内で認められた掘り込みである。南側を中世の大溝によって削平されているが、深さ約15cmの掘り込みを設け、その上部に頸部から胴部下半に至る大型の壺を



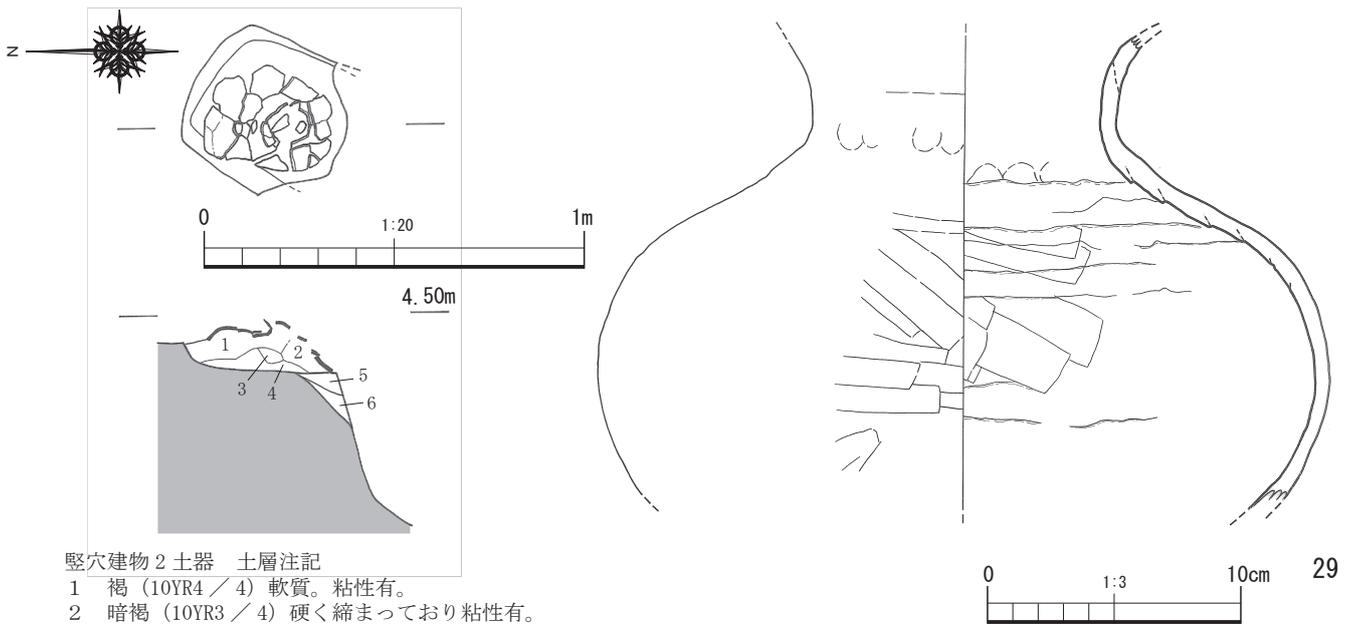
第 10 図 堅穴建物 2 実測図 (S=1/60)



第 11 図 堅穴建物 2 土器埋設炉実測図

1 個体設置している。29 がそれである。口縁部が大きく張り出し、頸部で大きくくびれた後、胴部で再び大きく張り出す。胴部の断面は球形よりやや平坦な形状を呈する。なお、壺の設置された掘り込みの南側は更に深い落ち込みが認められたが、溝状遺構に削平されているため詳細は不明である。

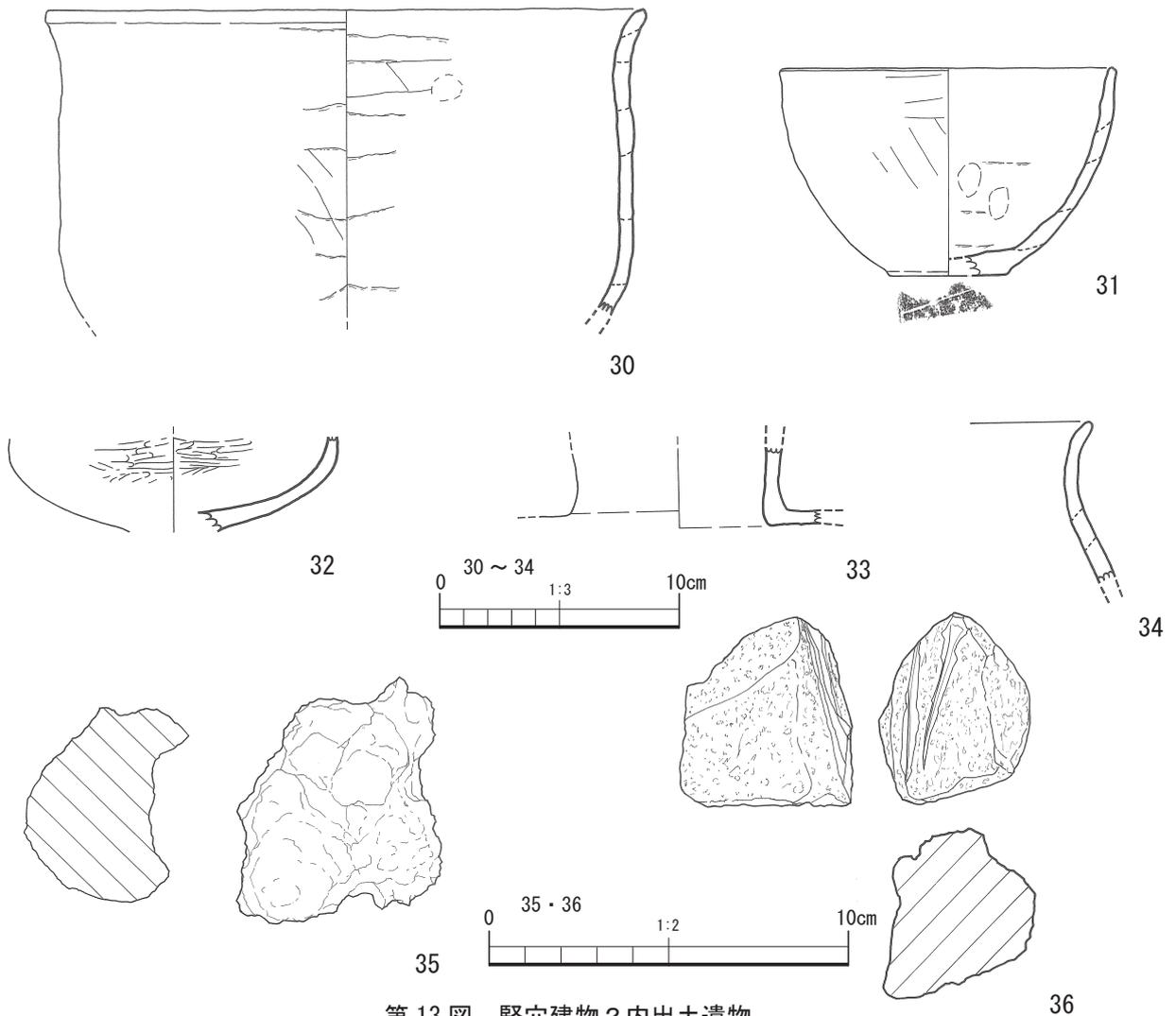
30 ～ 36 は堅穴建物 2 内の出土遺物である。30 は中型で長胴を呈する甕である。頸部は殆どくびれを持たずに胴部に達する。31 は小型である。形状は甑に似るが、底面に穴は認められず、



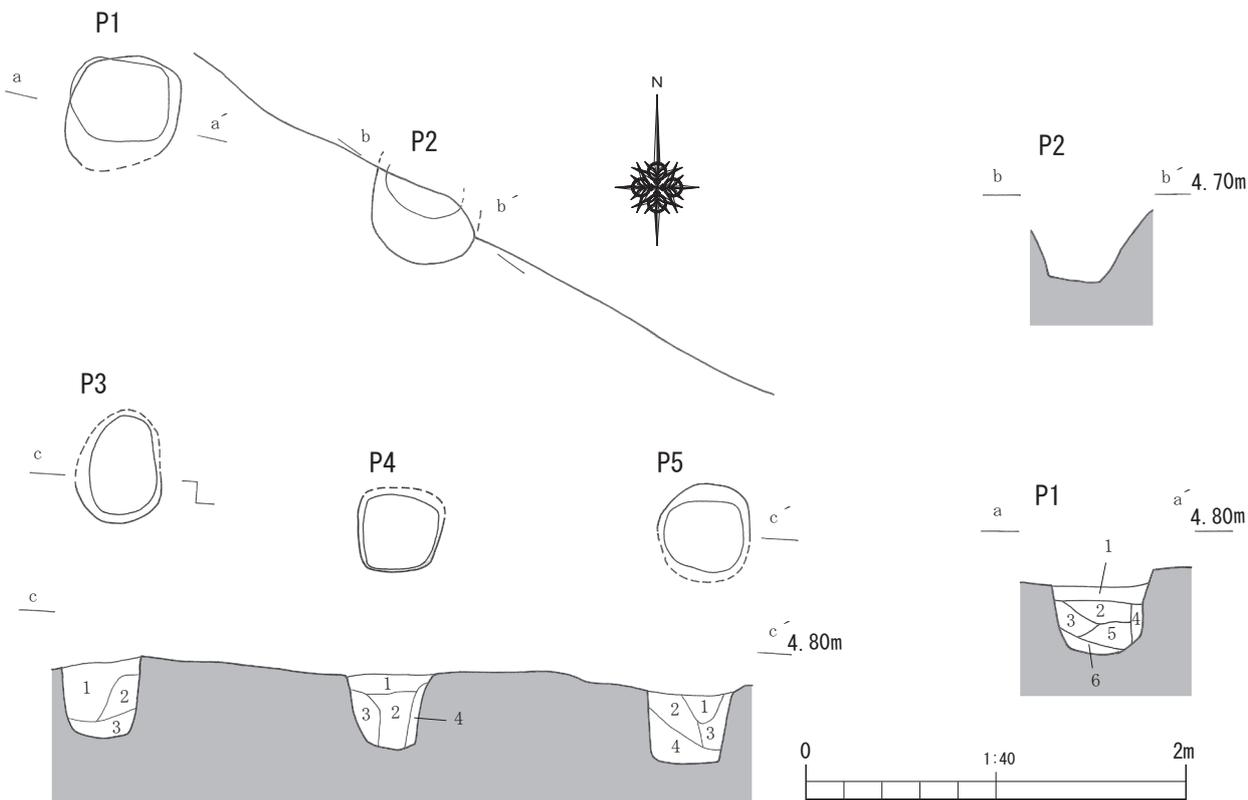
竪穴建物 2 土器 土層注記

- 1 褐 (10YR4 / 4) 軟質。粘性有。
- 2 暗褐 (10YR3 / 4) 硬く締まっており粘性有。
- 3 黒褐 (10YR2 / 4) 軟質。粘性僅かにあり。
- 4 暗褐 (10YR3 / 4) 硬く締まっており粘性有。
- 5 褐 (10YR4 / 4) 硬く締まっており粘性有。
- 6 暗褐 (10YR3 / 3) 軟質。粘性有。

第 12 図 竪穴建物 2 内土坑と出土遺物



第 13 図 竪穴建物 2 内出土遺物



掘立柱建物 1

P1 土層注記

- 1 にぶい黄褐 (10YR5 / 3) シルト質。やや軟質。黄褐色砂質土多く混じる。
- 2 褐灰 (10YR4 / 1) シルト質。硬く締まっている。
- 3 灰黄 (10YR4 / 3) シルト質。やや軟質。焼土粒子を微量含む。
- 4 暗黄灰 (2.5Y4 / 2) シルト質。やや軟質。層全体に黄褐色砂質土多く含む。
- 5 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) シルト質。やや硬く締まっている。
- 6 オリーブ褐 (2.5Y4 / 4) 砂質。軟質。黄褐色砂質土を多く含む。

P2 土層注記

- 1 灰黄褐 (10YR4 / 2) 砂質。軟質。
- 2 黄褐 (2.5Y5 / 3) 砂質。軟質。黄褐色砂質土主体。
- 3 灰黄 (2.5Y6 / 2) 砂質。軟質。黄褐色砂質土を多く含む。

P3 土層注記

- 1 灰黄褐 (10YR4 / 2) シルト質。やや硬い。黄褐色砂質土を少量、焼土粒子を微量含む。

- 2 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) シルト質。やや硬い。黄褐色砂質土を多量に含む。

- 3 黒褐 (10YR3 / 1) 砂質。軟質。黄褐色砂質土を多量に含む。

P4 土層注記

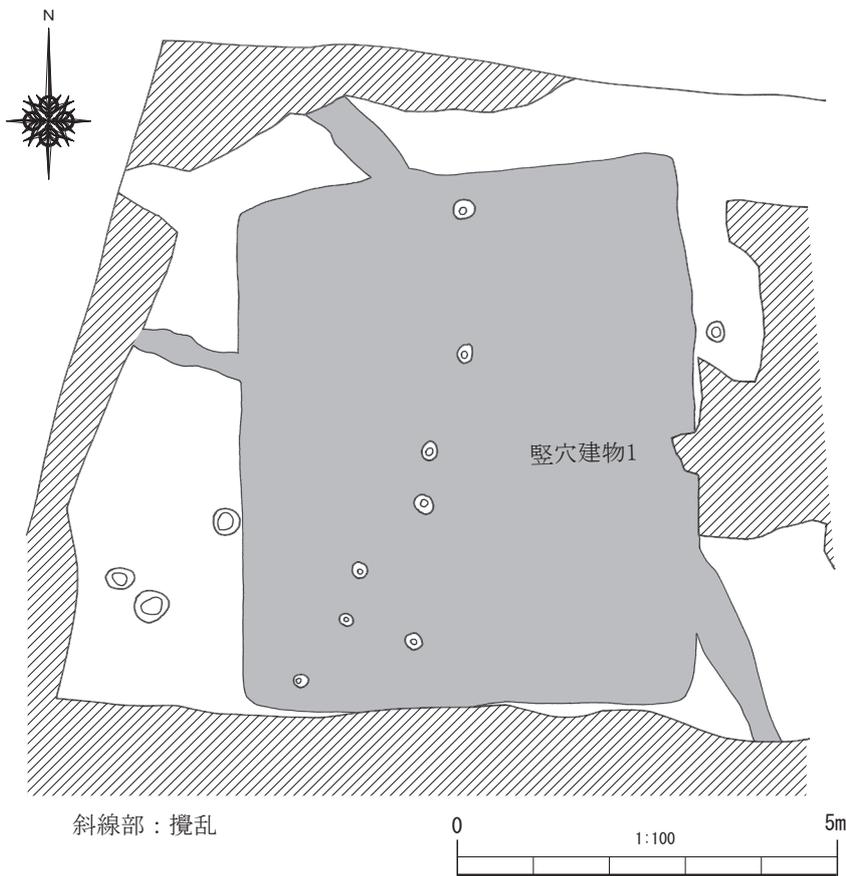
- 1 黒褐 (10YR 黒褐 3 / 2) シルト質。やや硬い。黄褐色砂質土、焼土粒子を夫々微量含む。
- 2 灰黄褐 (10YR4 / 2) シルト質。やや硬い。黄褐色土差質土を少量、焼土粒子を微量含む。
- 3 黄褐 (2.5Y5 / 3) シルト質。やや軟質。黄褐色土粒子を多く含む。
- 4 褐灰 (10YR4 / 1) シルト質。軟質。黄褐色土砂質土を多く含む。

P5 土層注記

- 1 にぶい黄 (10YR5 / 3) シルト質。軟質。
- 2 灰黄褐 (10YR4 / 2) シルト質。やや硬い。
- 3 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) シルト質。やや硬い。
- 4 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) シルト質。やや硬い。層中に黄褐色土砂質土をブロック単位で混入。

第 14 図 掘立柱建物 1 (S=1/40)

鋭利な線刻が残される。以上の特徴から小型の甕と考えられる。32 は高坏の杯部と考えられる。内外面に工具によるケズリもしくはミガキが行われる。33 は須恵器壺の胴部から口縁部にかけての破片である。垂直に近い角度で立ち上がる頸部に対し、胴部は直交に近い角度で張り出すことから、提瓶の可能性もある。34 は土師器甕の口縁部から頸部である。胴部が大きく張り出すことから、小型長胴甕と考えられる。35 は鉄滓である。断面が楕形になることから、羽口から流出したと考えられる。36 は軽石である。研磨による成形により、歪ながら多面体となっている。なお、最も広い平坦面には、鋭利なヘラ状の道具による溝が 2 条彫りこまれている。



第15図 ピット群分布図 (S=1/100)

#### 第4節 掘立柱建物

##### (第14図)

調査区南西部より、柱穴がやや規則的に配置する状況を確認した。

掘立柱建物と判断した柱穴は5基であり、配列は1間×2間である。南の列は隣接する溝状遺構2によって遺構の一部を消失しており、柱穴は更に南側まで存在した可能性も考えられる。柱穴は径約50cm、深さ50～60cmであり、柱痕は認められない。SP5が南側にずれるなど、ややその配置はやや歪である。埋土からは土師器が数点出土したが、小片のみであり時期は不明である。

#### 第5節 ピット群 (第15図)

調査区北西部より、暗褐色を呈する堅穴建物1の検出面より、黒色の埋土を持つ小規模なピットを8期検出した。いずれも径約20cm、深さ約20cmと小規模である。埋土からの出土遺物はないためこれらのピットがいつ掘られ埋没したのか、詳細は不明である。

#### 第6節 溝状遺構

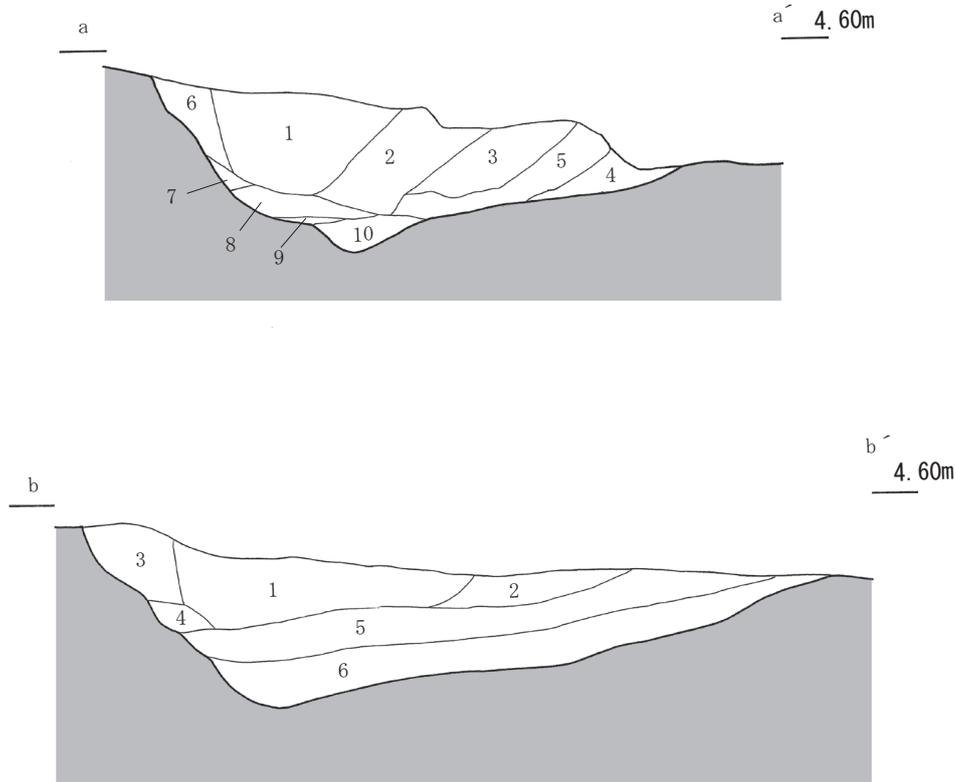
溝状遺構は、調査区北～中部と南部に二分される。以下、北～中部を溝状遺構1、南部を溝状遺構2として説明したい。

##### 溝状遺構1 (第3図)

幅30～50cm、深さ30～50cmを呈する溝である。調査区の北～中央部において検出された。遺構は堅穴建物1内で2条、北西から南東方向に向かって伸びており、堅穴建物1内で連結する。遺構は堅穴建物1東側の攪乱を免れた場所からも2条検出されており、溝状遺構1と連結していた可能性も考えられる。遺構は北側は深さ30cmと浅く、南側は50cmと深くなることから、地形に沿って北から南へと排水するために構築されたと考えられる。溝からの出土遺物は土師器の小片のみであるため詳細な時期は不明であるが、中世の土師器・陶磁器類を含まないことから古代の所産と考えられる。

##### 溝状遺構2 (第25図)

調査区南部より検出した。残存部分の幅は約4.5mであるが、住宅の削平のために南側を消



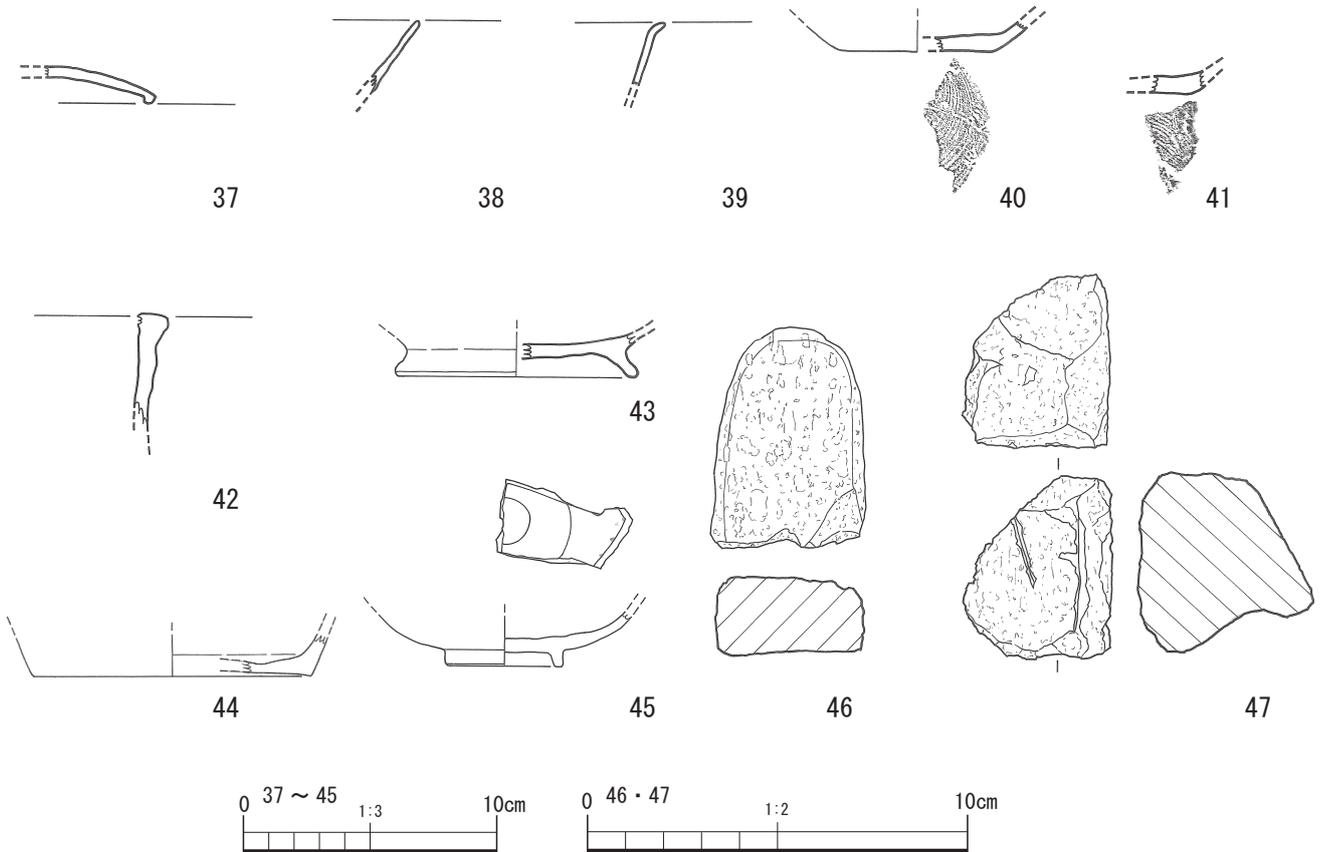
溝状遺構

断面 a-a' 土層注記

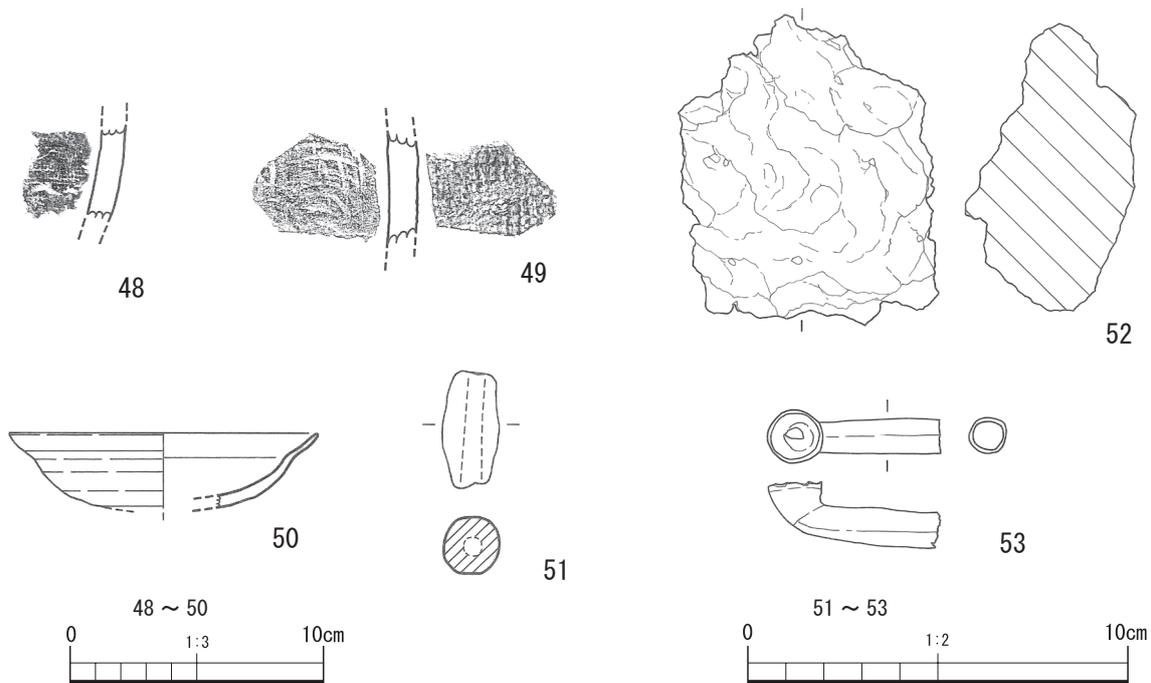
- 1 灰黄褐 (10YR4 / 2) 砂質。軟質。小石を少量、焼土粒子を微量含む。
- 2 にぶい黄褐 (10YR4 / 3) 砂質。軟質。小石を多く含む。
- 3 黒褐 (10YR3 / 2) 砂質。軟質。黄褐色砂質土のブロックを多く含む。
- 4 にぶい黄褐 (10YR3 / 2) 砂質。軟質。黄褐色砂質土を微量含む。
- 5 暗褐 (10YR3 / 3) 砂質。軟質。小石を多量、焼土粒子を微量含む。
- 6 暗褐 (10YR3 / 3) 砂利質。軟質。小石によって構成される層。

断面 b-b' 土層注記

- 1 断面 A-A' 1 層と同じ
- 2 断面 B-B' 2 層と同じ
- 3 灰黄褐 (10YR4 / 2) 砂質。軟質。小石を微量含む。
- 4 暗灰黄 (2.5Y4 / 2) 砂質。軟質。小石を少量含む。
- 5 褐灰 (10YR4 / 4) 砂質。軟質。粘質土を少量、小石を多量含む。
- 6 灰黄 (10YR4 / 2) 砂質。軟質。黄褐色砂質土を多く含む。
- 7 灰黄褐 (10YR5 / 2) 砂質。軟質。砂の粒子は粗い。
- 8 暗灰黄 (2.5Y4 / 2) 砂質土と粘質土の混合層。軟質。小石多く含む。
- 9 暗灰黄 (2.5Y5 / 2) 粗粒砂と小石の混合層。軟質。
- 10 暗灰黄 (2.5Y5 / 2) 砂利質。粗流砂が少量混じる。軟質。



第 16 図 溝状遺構 2 と出土遺物



第17図 上層及び攪乱層出土遺物

失しており、更に幅広であったと考えられる。溝の断面は北側は急角度に立ち上がるのに対し、南側は緩やかである。土層断面を観察すると、特に断面 a-a' において斜方向の分層ラインを複数見ることができる。これは、洪水等により溝が埋まった後に、溝としての機能を回復させるために繰り返し掘り返されたと考えられる。

溝状遺構は、5次調査の西側に位置する4次調査区からも検出されている。方向が同じであることや幅広であることから、一連の遺構と考えられる。

37～47は溝状遺構2からの出土遺物である。37と39は施釉土器であり、中・近世の遺物である。また40と41は底面に残された糸切り痕から中世の皿と考えられる。また43は内黒土器であり古代に属する。44は近世の陶磁器、45は染付の椀である。46と47は軽石であり、研磨によって成形を行っている。溝埋土からの出土遺物は、古代を一部含みながらも中・近世の遺物が多いことから、溝は中世に構築され、近世にかけて埋没しながら使用されたことを示している。

### 第7節 上層及び攪乱層出土遺物（第17図）

今回の調査は残存状態が悪いことから、遺構検出面の上層や攪乱層からも遺物が認められた。

48は古代に相当する布痕土器である。49は須恵器であり、内面に同心円、外面に細かな格子目のタタキ痕が残される。外面には自然釉が付着する。50は施釉土器であり中世と考えられる。51は竹管状の土錘である。52は鉄滓である。上層のため竪穴建物1から出土した鉄滓との関係は不明である。53は煙管である。形状から江戸後期と思われる。

第1表出土土器観察表(1)

掲載頁	図番号	掲載番号	出土遺構	種別器種	法量( ): 復元			色調		焼成	調整		胎土(上: 大きさ、下: 量)				備考
					口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	A	B	C	D	
8	7	4	竪穴建物1 (遺構内土坑)	須恵器高坏	10.3			灰 N4/0	暗灰 N3/0	堅緻	連続刺突文	ナデ					
		5	竪穴建物1 (遺構内土坑)	須恵器甕	15.0			褐灰 10YR5/1	灰白 5YR8/1	不良	回転ナデ	回転ナデ					
10	8	7	竪穴建物1	土師器甕	18.8	3.4	29.5	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	工具ナデ	工具ナデ	5mm多	2mm微			
		8	竪穴建物1	土師器甕	22.0			にぶい褐 7.5Yr5/4	にぶい褐 7.5Yr5/4	良好	工具ナデ	工具ナデ	4mm少				
		9	竪穴建物1	土師器甕	16.4		16.6	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 7.5YR5/4	良好	横ナデ→工具ナデ	横ナデ→斜ナデ	5mm多				
		10	竪穴建物1	土師器甕	(14.3)			にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	工具ナデ	工具ナデ	5mm多				
		11	竪穴建物1	土師器長型壺				明赤褐 5YR6/3	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	刷毛目→横ナデ	丁寧なナデ		微細多	微細多		
		12	竪穴建物1	土師器坏	13.8	5.8	4.6	橙 5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	ナデ→木葉底	ナデ	1mm多				
		13	竪穴建物1	土師器坏	(18.1)	6.0		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	良好	ミガキ	ミガキ			微細多		
		14	竪穴建物1	土師器坏	18.0	2.0	5.7	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/4	良好	不明	不明	2mm多				
		15	竪穴建物1	土師器坏		3.4		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	良好	不明	ナデ		微細多			
		16	竪穴建物1	土師器坏	13.9			にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	不良	不明	斜ナデ(指押さえ)	1mm少				
17	竪穴建物1	土師器高坏	16.4	5.7		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4	良好	横ナデ	不明					底面に木葉痕		
11	9	18	竪穴建物1	土師器甕		(5.8)		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	ナデ→丁寧なナデ	工具ナデ	4mm多				
		19	竪穴建物1	須恵器甕				黄灰 2.5Y5/1	暗黄灰 2.5Y5/2	堅緻	掻き目、タタキ	同心円文タタキ		微細多			
		20	竪穴建物1	須恵器甕				黒褐 5YR3/1	灰 N4/6	堅緻	掻き目、タタキ	同心円文タタキ		2mm多			
		21	竪穴建物1	須恵器甕				黒褐 7.5YR4/1	灰 N4/0	堅緻	併行タタキ、掻き目	同心円文タタキ					
12	11	26	竪穴建物2 埋設炉	土師器甕	16.9			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	横・斜ナデ	横・斜ナデ	3mm多				
		27	竪穴建物2 埋設炉	土師器甕	(20.4)			にぶい橙 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	横工具ナデ	横工具ナデ	4mm多				
		28	竪穴建物2 埋設炉	土師器底部		3.2		にぶい黄褐 10YR5/3	灰白 10YR7/1	良好	ケズリー指ナデ	工具ナデ→ナデ	3mm多				
13	13	29	竪穴建物2 遺構内土坑	土師器壺	(13.5)			にぶい橙 5YR6/4	にぶい黄褐 10YR5/3	良好	横・斜ナデ・指押さえ	工具ナデ→ナデ指押さえ	4mm多				
		30	竪穴建物2	土師器甕	(24.8)			にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 10YR5/3	良好	工具ナデ	工具斜ナデ	2mm多				
		31	竪穴建物2	土師器甕	13.8	5.0	8.7	にぶい橙 2.5Y7/3	明褐灰 7.5YR7/1	やや良好	横・斜ナデ	横・斜ナデ	4mm多	微細多			底部木葉痕
		32	竪穴建物2	土師器高坏				橙 5YR6/6	褐灰 10YR4/1	良好	横・斜ミガキ	斜ミガキ	2mm多				
		33	竪穴建物2	須恵器壺				褐灰 10YR4/1	暗灰黄 2.5Y4/2	堅緻	回転ナデ	回転ナデ			微細少		
		34	竪穴建物2	土師器甕				にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	良好							
16	16	37	溝状遺構	施釉陶器蓋				浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	良好							
		38	溝状遺構	土師器坏				淡黄褐 10YR6/4	灰白 7.5YR8/2	不良	横ナデ	横ナデ					
		39	溝状遺構	施釉陶器				灰オリーブ 5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2	良好							
		40	溝状遺構	土師器				褐 7.5YR4/4	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	糸切底	回転ナデ	2mm微				

第2表 出土土器観察表 (2)

掲載頁	図番号	掲載番号	出土遺構	種別器種	法量 ( ): 復元			色調		焼成	調整		胎土 (上: 大きさ、下: 量)				備考
					口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	A	B	C	D	
16	16	41	溝状遺構	土師器 皿				にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	良好	糸切底	回転ナデ	2mm 微				
		42	溝状遺構	土師器 口縁部				にぶい褐 7.5YR5/3	灰黄褐 10YR5/2	良好	ナデ、指 押さえ	ナデ	3mm 微				
		43	溝状遺構	土師器 内黒土器		(10.3)		にぶい褐 7.5YR5/3	黄灰 2.5Y4/1	良好	回転ナデ、 ヘラケズリ	内黒、 ミガキ	3mm 多				
		44	溝状遺構	陶器 底部		(10.8)		灰 7.5Y4/1	灰オリーブ 7.5Y6/2	良好							
17	17	45	上層	染付 椀		(4.5)				良好	施釉	蛇の目釉 はぎ					
		48	上層	土師器 布痕土器	(12.2)			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 5YR6/4	良好	ナデ	布目圧痕					
		49	上層	須恵器 甕				灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	格子目 タタキ	同心円文 タタキ	微細 少				
		50	上層	施釉陶器 坏						良好							

第3表 出土土製品観察表

掲載頁	図番号	掲載番号	出土遺構	種別器種	色調		備考
					外面	内面	
7	6	1	竪穴建物1	土師質 羽口	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	下端部に鉄滓、周辺が熟変色
		2	竪穴建物1	鉄滓	オリーブ灰	にぶい褐	羽口に付着した鉄滓の剥落
		3	竪穴建物1	鉄滓	にぶい褐	黄灰	羽口に付着した鉄滓の剥落
13	13	35	竪穴建物1	鉄滓	オリーブ灰	にぶい褐	鉄滓

第4表 出土石器観察表

掲載頁	図番号	掲載番号	出土遺構	種別器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
8	7	6	竪穴建物1	砂岩 敲石	6.1	5.6	4.0	206.0	全面被熱。表面に敲打痕
11	9	22	竪穴建物1	砂岩 敲石	10.2	5.7	4.7	340.0	全面被熱。表面に敲打痕
		23	竪穴建物1	砂岩 台石	8.9	6.5	6.1	-	
		24	竪穴建物1	砂岩 台石	8.7	9.4	2.2	182.0	成形痕あり
		25	竪穴建物1	凝灰岩質 敲石	7.8	5.6	3.7	111.5	表裏に成形痕あり
13	13	36	竪穴建物2	軽石製品	5.3	2.2	4.2	19.0	全面に成形痕あり
16	16	46	上層	軽石製品	5.8	3.9	2.1	14.8	
		47	上層	軽石製品	4.9	4.9	4.6	19.0	

## 第IV章 まとめ

今回実施した発掘調査は、調査前の竪穴建物で検出された遺構は、竪穴建物2軒、掘立柱建物1棟、古代、及び中世の溝状遺構、ピット群である。

竪穴建物1は、遺構内土坑の出土須恵器がMT85併行段階であることや、南西部出土の土師器が今塩屋氏・松永氏の編年案（今塩屋・松永2002）では6期に当たる。これらの理由から、使用もしくは埋没は5世紀前半と考えられる。竪穴建物1の東部には焼土の集中が認められた。周辺から鉄滓や羽口が出土し、遺構内から赤変した台石も出土することから、鉄製品の製造（鍛冶）を行った可能性が高い。焼土集中部には火床を思わせる小規模かつ浅い窪みが点在することもそれを示している。ただし大半が現代の削平を受けているためその詳細は不明である。遺構南西部では床面付近より土師器を中心に遺物が多く出土する。一括廃棄と呼べるほどの密度ではないが、南壁の一部をオーバーハング状に掘削した痕跡も含めて、遺構廃絶時の儀礼行為による可能性が考えられる。また遺構内から検出された土坑は、埋土中から須恵器が確認された。竪穴建物南辺の中央に土坑を持ち、須恵器が出土する例は北中遺跡だけでなく大町遺跡からも確認されていることから、共通した儀礼的行為が行われたと考えられる。またこの土坑は

竪穴建物構築時に掘られていることから、竪穴建物の時期を決定する際の有効な材料となり得るのではないだろうか。

竪穴建物2の出土土師器は、前述の土師器編年に従えば6～7期に埋没したと考えられる。遺構の中央付近で検出された土器埋設炉は、浅い窪みに球形を呈する胴部を持つ甕の口縁部・頸部を設置したものであり、今塩屋氏の分類（今塩屋2004）によるとⅦ-a類にあたる。また、遺構東部からは壺の胴部上半部を確認した。壺形土器は土坑を伴っているが大半を大溝によって削平されており、竪穴建物との時間的關係や構築の意図は不明である。

掘立柱建物1は、遺構の切り合いより竪穴建物2の埋没後に構築されたことは明らかであるが、時期比定の可能な遺物がないため不明である。大溝により消失した可能性が高いと考えられるものの、柱穴の配置がやや歪であり規格性に乏しいことや、布掘りを伴わない柱穴であることから、4次調査で検出されたような掘立柱建物とは異なる性格の施設と考えるのが自然であろう。

調査区内で検出された溝は、調査区北部～中部において検出された小規模の溝と、調査区南部において検出された大溝の二種に大別できる。小規模の溝は竪穴建物の埋没後に構築されており、古墳時代後期～古代の所産と考えられる。溝は調査区内で何度も交差しているが、埋土の違いが殆ど認められないことから、洪水等により埋没するのたび掘り直されたと考えられる。一方南部の大溝は中世以降に構築されており、土層断面から中世～江戸時代にかけて埋没しながら何度も掘り返されたことが窺い知ることができる。

調査区北部より検出された小ピット群は用途は不明であるが、竪穴建物1の検出面で確認されたため、古代以降の構築である。

北中遺跡は、過去四度にわたり発掘が行われている。その結果、5次調査で確認された竪穴建物は古墳時代集落の最盛期に当たる。鍛冶の可能性のある痕跡も含め、集落を構成する一要素を成していたのであろう。

それ以後も、古代から近世に至るまで遺構が認められることから、調査区内は北中地区の微高地の一角として長く生活の場として使用された事が、調査を通して明らかとなった。

#### (参考文献)

- 今塩屋毅行 松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器—宮崎平野部を中心に—」  
『第5回九州前方後円墳研究会 古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—発表要旨資料』  
今塩屋毅行 2004「南部九州古墳時代の火処—「土器利用炉」に着目して」『福岡大学考古学論集』  
宮崎市教育委員会編 1998『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第33集  
宮崎市教育委員会編 1981『浄土江遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第6集  
宮崎市教育委員会編 1993『浄土江遺跡Ⅱ』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第25集  
宮崎市教育委員会編 1998『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第33集  
宮崎市教育委員会編 1999『北中遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第38集  
宮崎市教育委員会編 2002『北中遺跡Ⅱ』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第51集  
宮崎市教育委員会編 2003『宮脇第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第55集  
宮崎市教育委員会編 2003『北中遺跡Ⅲ』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第56集  
宮崎市教育委員会編 2018『北中遺跡(4次)』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第121集  
宮崎市教育委員会編 2018『大町第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第117集

# 写真図版



図版 4



竪穴建物 1 検出状況（南から）



竪穴建物 1 半裁状況（南から）



竪穴建物 1 完掘状況（南から）



一段目：竪穴建物1 検出状況（北西から）  
二段目：竪穴建物1 焼土集中区（東から）  
三段目左：竪穴建物1 焼土集中区（南東から）  
三段目右：竪穴建物1 焼土集中区出土遺物





上段：  
 竪穴建物 1 内土坑遺物出土状況（北東から）  
中段左：  
 竪穴建物 1 内土坑出土遺物①  
下段：  
 竪穴建物 1 内土坑出土遺物②





上段：竪穴建物 1 土層断面（東から）  
中段：竪穴建物 1 内遺物集中部出土状況（北東から）  
下段：竪穴建物 1 内遺物集中部出土状況（西から）



竖穴建物 1 内出土遺物 (1)



竪穴建物 1 内出土遺物 (2)



竪穴建物 2 完掘状況 (南から)



上段： 竪穴建物 2 完掘状況（南から）  
中段左： 竪穴建物 2 土器埋設炉検出状況①（南東から）  
中段右： 竪穴建物 2 土器埋設炉検出状況②（北東から）  
下段左： 竪穴建物 2 土器埋設炉検出状況②（北東から）  
下段右： 竪穴建物 2 土器埋設炉に使用された土器



竪穴建物 2 内出土遺物（壺）  
検出状況（東から）



竪穴建物 2 内出土遺物（壺）





竪穴建物 2 内出土遺物



ピット群検出状況(北から)





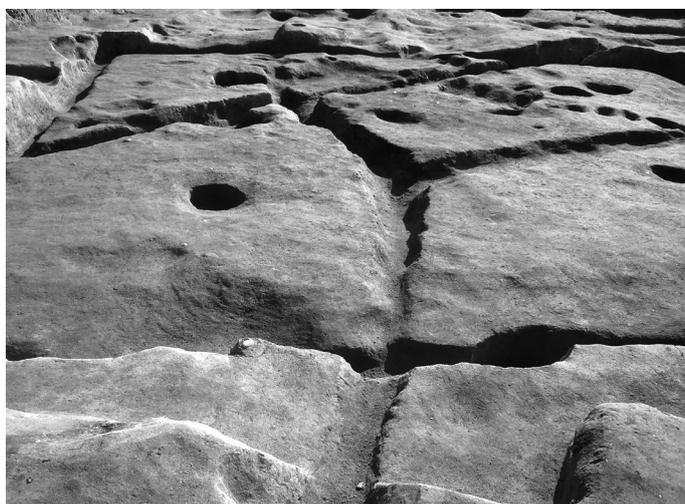
溝状遺構 1 完掘状況・掘立柱建物検出状況（西から）



溝状遺構 1 完掘状況（北西から）



溝状遺構 1 完掘状況（北東から）



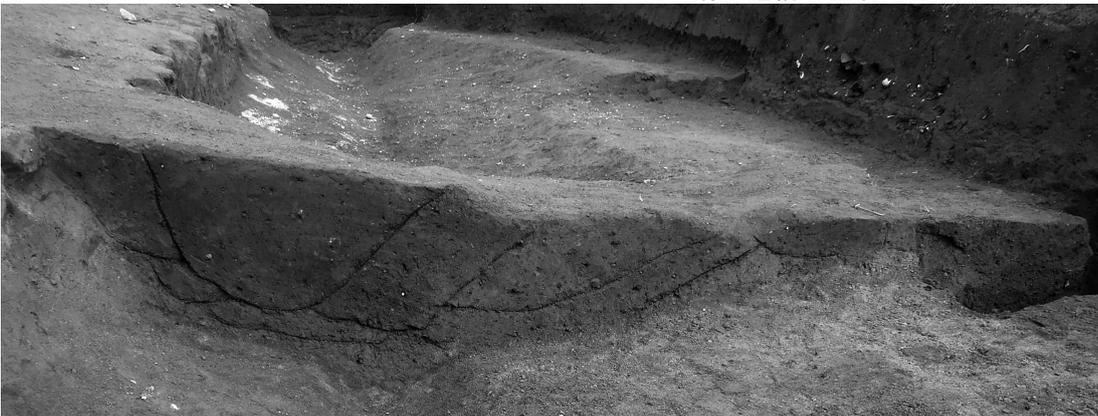
溝状遺構 1 完掘状況（西から）



溝状遺構 2 完掘状況・掘立柱建物 1 検出状況（西から）



溝状遺構 2 土層断面 (b-b')



溝状遺構 2 土層断面 (a-a')

# 報告書抄録

ふりがな	きたじゅういせき ご						
書名	北中遺跡Ⅴ						
副書名	共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第124集						
編集者名	金丸武司						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-2101 宮崎市大字跡江4200番地3						
発行年月日	2019年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査原因	種別
きたじゅういせき 北中遺跡 だい じちようさ (第5次調査)	みやざきけんみやざきし 宮崎県宮崎市 よしむらちようきたじゅうこう 吉村町北中甲	45201	21-119	31°55'07" 付近	131°26'50" 付近	個人事業	集落跡
所収遺跡名	調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構	主な遺物		
北中遺跡 (第5次調査)	2015年 1月28日	364 m <sup>2</sup>	古墳時代	竪穴建物	土師器、須恵器、鉄滓		
	〔 2015年		古代	溝状遺構 掘立柱建物	布痕土器、内黒土器		
	3月25日		中世	掘立柱建物	土師器		

宮崎市文化財調査報告書 第124集

# 北中遺跡Ⅴ

平成31年3月

宮崎市教育委員会